

史料紹介 鳥取藩士安達清風「安政六年己未日乗 二」

笹部昌利

解題

(1) 安達清風と史料

安達清風は、幕末維新期鳥取藩の政治史における主要な人物であり、その人物に関わる基礎情報としては、『鳥取藩史』一卷に所収される「藩士列伝」に立項される「安達清一郎」が特に充実している。『鳥取藩史』は、明治四二年（一九〇九）から昭和八年（一九三二）に池田侯爵家の命により、旧藩士湯本文彦を編集長として編まれた「藩史稿本」（鳥取県立博物館蔵）を鳥取県立図書館が刊行したものである。^①

他に、安達先生頌徳碑建設委員会編『贈正五位安達清風』^②があり、安達の日本原開拓事業の功績を称えて岡山県勝北郡（現、津山市）に建てられた「頌徳碑」に刻まれた碑文（影山潔撰）と、幕末の鳥取藩主池田慶徳の伝記（編纂は伝記稿本のみ。現在は『贈従一位池田慶徳公御伝記』^③として出版刊行）編纂に従事した梶川栄吉「贈正五位安達清風先生」と題する講演録からなるが、講演録の内容は「藩史稿本」を依拠したものととなっている。

安達はまとまった日記を残しており、それは、日本史籍協会編『安達清風日記』^④および同編『維新日乗纂輯』

四卷所収の「安達清風日記 補遺⁽⁵⁾」として刊行されている。

『安達清風日記』には、安政元年（一八五四）正月元日から安政六年（一八五九）五月一四日まで。文久二年（一八六二）九月九日から文久三年（一八六三）十二月二四日まで。元治元年（一八六四）五月一八日から同年七月一二日まで。慶応元年（一八六五）正月元日から同年九月二七日まで。慶応二年（一八六六）正月元日より同年七月二四日まで。明治元年（一八六八）正月六日から同年一〇月三日までの日記があり、『安達清風日記 補遺』は『安達清風日記』の欠を補うものであり、慶応二年七月二四日より慶応三年二月晦日まで。明治二年（一八六七）正月元日からはその頻度は減少するものの、明治四年二月まで断続的にも記載がある。

日記情報に欠如しているのは、①安政六年五月一日から文久二年九月八日まで。②文久三年（一八六三）二月二五日から元治元年五月一七日まで。③元治元年七月一三日から同年十二月晦日まで。④慶応元年九月二八日から同年十二月晦日まで、となる。

前出『安達清風日記』の解題において、小西四郎は、安政

<p>安政六年己未日乗 先憂國系忠業所</p>	<p>五月十九日曇 早天家君冬 城賀正 朝試馬 下午和田勝至酒島</p>	<p>十六日曇夜暴雨</p>	<p>十七日雨 早天東信至 名原節 岸索 三希 間近日水戸家老某別三人 就縛 孔忠 義 又横濱交易所 落液坊市街衛甚修整妓 榎酒舖太盛又就金川臺上 別代東海道</p>	<p>晚山部兄書至云京師無異</p>
-----------------------------	--	----------------	---	--------------------

六年五月一五日から文久二年九月九日にいたる三年余りの間、日記が欠如していることにつき、「安政の大獄の嫌疑を恐れて、これを自ら消滅し、その後のものも何等かの理由で散逸したものと考える」と推考したが、日記の欠落部①の安政六年五月一五日より文久元年正月一〇日までの日記については、清風の子孫に当たる安達満郎氏が浄書稿本を所蔵されており、筆者に提供された史料（複写版）⁷⁾の記載内容、一部草書体で認められた文字の筆跡から判断し、後年に安達自身によって浄書されたものであると考える。

今回、翻刻、紹介した史料は、安政六年五月一五日から万延元年（一八六〇）閏三月二〇日に至る、安達自身が「安政六年己未日乗 二」と題した日記である。既刊分の日記と同様に、その才知がうかがえる漢文混じりの文体であり、内容については、家族および縁者の暴瀉病、すなわちコレラへの罹患と看病の状況や、実子の誕生などを含む自らの日常に加え、鳥取藩士および他藩士との交流が記され、なかでも安政五年より執行されている徳川幕府による政治肅清、いわゆる「安政の大獄」に関する収集情報、さらには安政七（一八六〇）年三月の桜田門外の変に関する情報と、事変に対する安達自身の思いが赤裸々に書き綴られている。

安達の書状および建議書などについては、日本史籍協会編『鳥取池田家文書』一～四卷⁸⁾、『贈一位池田慶徳公御伝記』一～五卷および別巻など、幕末期の鳥取藩池田家関係の刊行史料に数多く掲載される。また鳥取県立博物館蔵「鳥取藩政資料」や同館蔵『堀文庫』にも書状原本が多数伝存する。「鳥取藩政資料」には安達家の履歴が認められた「安達清風家譜」や京都、大坂方面から発信された「御用状」のなかにも安達の書状が数多くうかがえる。藩主池田慶徳に呈した建白書などを湯本文彦がまとめ上げた「安達清風封事建議并解題」、また明治元年の政治行動をまとめた「安達清風戊辰信録・事表并補録」などが伝存する。『堀文庫』

は鳥取藩主侍講をつとめた儒者堀庄次郎家に伝存した史料が鳥取県立博物館に寄贈されたものであるが、同史料群には安達が堀庄次郎に宛てて時局を論じた書翰一〇点が収められている。

(2) 安政六年の安達清一郎

安達の幕末期の通名は「清一郎」であり、「清風」は、維新後に使用した号である。よって本稿中では「清一郎」を用いることにする。清一郎は、天保六年（一八三五）、鳥取城下寺町に生まれた。元締役、蔵役など財政関係の職を歴任した父、安達辰三郎に同行して、大坂・京都・江戸へ赴き、見識を深め、嘉永六年（一八五三）、江戸滞在中、ペリーの浦賀来航に遭遇し、鳥取藩が担当した江戸湾本牧警備に動員された。その後、安政元年（一八五四）四月、昌平黌に入學。翌二年四月、水戸へ留學して、弘道館会沢正志斎の講義に出席し、特に「神発流」（和洋折衷銃陣砲術）師範福地政次郎による砲術講義に留學期間の多くを費やした。

清一郎は水戸遊学中、藩主池田慶徳に宛て、数度にわたり建白書を認めている。なかでも安政三年（一八五六）五月に提出された建白書（七議）は、当時の彼の政治意識が色濃く出ている。まず①藩当局のありかたにつき、「人才御座候ても御政職ニ御用被遊候事無御座候間、二百年來無用之閑官閑人」と評し、「有為之士」は下級家臣からも実力主義で人材登用するべき、②家臣賞与につき、勤務年数の長短によるのではなく、個人の業績によって支給されるべき、③軍制改革につき、「流行二誘」われて西洋流の軍制改革をおこなうのではなく、「風土人氣に因て相定候ものにて、洋夷は自ら洋夷之風有之、本朝は自本朝之風有之」ので、西洋流、和流の長所、短所をよく吟味した上で、最適な軍制を決定すべき、④海防のため武士を土着させ、農兵を募って訓練し、隊を編成する。堅固な蒸気船を建造し、平時にも江戸との交通および物資の運搬に用いるべき、⑤大砲、小

銃を早期製造するため反射炉を建造するべき、と述べる。⁹⁾

清一郎は、鳥取藩政の現況を水戸藩の藩政改革に習う形で改革することを求めている。特に③軍制改革、④農兵、⑤大砲小銃製造は、水戸藩軍制改革に合致するものであり、①人材登用および家政に関する言路洞開要求は、これ以後一貫して唱え続けられる。水戸留学中に形成された清一郎の政治に対する意識は、その後の彼の政治活動の骨子となっていく。また江戸および水戸留学に際して政治的人脈を獲得したことは、彼自身が文久二年（一八六二）以降、藩外交に向かう折に極めて重要な要素となっていく。¹⁰⁾

安政四年六月、水戸留学から帰国した清一郎は、藩校尚徳館において水戸での学びの成果を伝えた。藤田東湖『弘道館記述義』、会沢安『新論』を講読し、藩に「神発流」砲術の採用を申請し、実技の伝授は「騎砲」術に及んだとされる。「騎砲」術教授は、安政五年（一八五八）五月までおこなわれた。清一郎による砲術教授はあくまで臨時になされたもので砲術教授は同藩士式宮丹治の業務であり、同じく水戸留学をしていた式宮の帰藩後は、清一郎は御役御免となった。

ゆえに安政六年（一八五九）段階で、安達清一郎の立場は、部屋住みの安達家嫡男であり藩校尚徳館の書生であった。父、安達辰三郎は文政十一年（一二二八）、銀札場銀奉行に就任後、蔵奉行、裏判吟味役など藩財政面で業績を上げた吏僚として現役で活躍しており、清一郎は、藩校において文武を学ぶ一書生として、安政六年という時を過ごしていたということになる。

注

（1）『鳥取藩史』第一巻 世家・藩士列伝、鳥取県立図書館、一九六九年、二三四～二三六頁。

- (2) 安達先生頌徳碑建設委員会編『贈正五位安達清風』同会、一九三三年。
- (3) 鳥取県立博物館編『贈従一位池田慶徳公御伝記』一―五巻及び別巻、一九八八―一九九二年。
- (4) 日本史籍協会編『安達清風日記』(東京大学出版会、一九二六年刊、一九六九年復刊)
- (5) 日本史籍協会編『維新日乗纂輯』四(東京大学出版会、一九二七年刊、一九六九年復刊)
- (6) 前掲『安達清風日記』六六五頁。
- (7) 未刊行の日記は、「安政六年己未日乗 二」と「万延紀元日乗」の二点からなり、筆者が二〇〇五年十一月十八日に佛教大学でおこなった講演「安達清風―鳥取藩京都留守居役の仕事―」に、安達家のご親戚にあたる西野功氏御夫妻が聴講され、講演後面談した折に、複写版をご提示され、研究に活用されたいとお話しをいただいた。原所蔵者は直系の御末裔にあたる安達満郎氏で、西野氏にお取次ぎいただき、研究利用および翻刻発表にかかる許可を頂戴した。お持ちいただいた複写は、横半帳の罫紙が上下二段に印刷されており、裏表紙にあたる部分に「安達清風日記 脱落分」との書き込みがあり、「五月十五日以前のものは、清風日記(日本史籍協会東京大学出版会発行のものに所載しあり)」との説明がなされていた。
- (8) 日本史籍協会編『鳥取池田家文書』一―四、東京大学出版会、一九一七―一九二七年刊、一九六八年復刊。
- (9) 「安政三年於江戸上慶徳公藩政大改革建議」(湯本文彦編「安達清風封事建議類并解 題」一九二二年、鳥取県立博物館蔵。
- (10) 安達を取り扱った刊行物としては、『鳥取県史』三、近世政治(鳥取県、一九七九年)が基礎的情報として存在し、拙稿「幕末期鳥取藩池田家における「家」存続の意識―長州藩毛利家処分への対応をめぐる大名家の「私」―」(『鳥取地域史研究』四、二〇〇二年、同「京よりの政治情報と藩は決定―幕末期鳥取藩池田家の情報収集システム―」(『家近良樹編』もうひとつの明治維新)有志舎、二〇〇六年)が、安達 of 政治動向をふまえ、幕末維新期の鳥取藩池田家の政治史を考察した研究である。また磯田道史「幕末維新期の藩校教育と人材登用―鳥取藩を事例として―」(『史学』七一巻二・三号、三田史学会、二〇〇二年)は、水戸遊学時に安達による藩主池田慶徳への建言が考察され、「言路洞開」や「人才挙用」と同義の言説が引用されていることをふまえ、「藤田東湖の著作『常陸帯』の影響を強くうけている」と評する。

※翻刻については以下を凡例としてとりおこなった。

(1) 異体字・合字・略字は、文字フォントに適当な字体がないことがあり、基本的に常用漢字およびカタカナとした。変体仮名については原文に従った。

(2) 闕字・平出については、浄書の状態を維持するために原文に従った。

(3) 割注表記は原文に従った。

(4) 人物の説明については、ルビ注で「」を付し、紙面が煩雑にならないように必要最低限の情報にとどめた。鳥取藩士については「藩士」とのみ記した。

(5) 誤字・見せ消ちについてはそのまま表記し、ルビ注にて正した。

(6) 欄外記述については、文中に「」を挿入し、示した。

(7) 差別的表記については、史料学的見地に立ち、そのままに留めた。

付記 小稿を作成するに当たり、安達満郎様、西野功様、安達家ご親族様に史料のご提供および安達清風に関してお持ちの情報を頂戴しました。記して謝意を表します。

安政六年己未日乘 二 先憂閣主人忠筆記

○五月十五日曇 早天家君參 城賀正

朝試馬、下午和田勝至酒焉

十六日曇夜暴雨

十七日雨、早天東信至〔石原節・桑原二書至〕

【後聞、表家老乃安嶋帶刀別二人乃〔水戸藩士茅根伊予之介〕茅根・鮎沢也】

聞、近日水戸表家老某別二人就縛〔後部藩士九鬼隆徳〕御預〔水戸藩士鮎沢伊太夫〕又横浜交易所落成、坊市街駟衢甚修整、妓樓酒舖太、盛又就金

川台上別閑東海道

晚山部〔藩士山部準太〕兄書至、云京師無異、賴三樹応対如流獄吏大困却云々、又鷹司老公落飭號拙山世人評云非拙山也、〔鷹司政通〕

其築山拙也、同右府公号隨樂、近衛公翠山、三条公号澹空云々〔近衛忠房〕〔三条実万〕

十八日雨、午後支封左衛門尉侯就国家君就其第而賀〔池田清直〕比日梅霖密〔藩士西原氏〕難為情況婦人近日之

十九日雨、早朝和田瀬内來、蓋西原頑迷不可解、說雲昇大困却、謀之瀬内、以故瀬内來談、此日以雲昇報〔藩士西原小三郎〕〔藩士岸雲昇〕

西原須婦人歸家、而後徐議其可否

下午試馬、中野甚内・岸雲及和田勝來訪〔藩士中野甚内〕

廿日雨連日霖雨殆不堪情

下午堀子光來談〔藩士堀庄二郎〕

廿一日雨午後快晴、午後岸雲昇來、未得西原氏之報、自今之西原氏云々、晚再來說、訪西原氏不在、說利害

於内氏豚兎而云々

廿二日雨 早天城内試馬遇雨而帰

午後訪和田叔・瀬内勝蔵、訪西原氏議可否小三言、以明日報岸氏云々

廿三日晴、午後訪和田

廿四日曇、午後雲昂来〔西原氏領迷不可解
說辭其周旋之事〕

此日有命十一日所改之職名率停止〔以貞彦輩
唱正議也〕荒尾但馬為文事大奉行、和田邦之助為武事大奉行、池田兵庫介為

刑獄御用掛、池田式部為官職御用掛、荒尾駿河為学校御用掛、荒尾蔵人為軍用御用掛、大西義左衛門為作

事御用掛、田村貞彦為郡方御用掛、関轄如左

文事大奉行

官職御用掛 学校御用掛

作事御用掛 郡方御用掛

着座〔幼少〕 大寄合

証人上〔幼少〕 御側用人

武事大奉行

刑獄御用掛 軍用御用掛

旗頭 奇師〔附屬離
レシ事〕

御旗本遊軍 御城代

⑤刑獄御用掛守衛方

御城番 御目付

㊦官職御用掛考勲方

御附人 御側役

御方々様付 大崎留守

寄合附屬二無之 無頭

㊦学校御用掛礼式方

学頭 御勤役

御奏者 学館奉行

寺社奉行 京大坂伏見

㊦軍用御用掛船方

大小姓頭 表御用人

御軍艦 式宮雅楽

御船手 御旗本物頭

米倉詰メ物頭 遊軍物頭

御使者 御使役

諸隊御目付

㊦作事御用掛 屋敷町方

御普請奉行 町奉行

㊦郡方御用掛作廻方

蠟座 国産 元ノ

在方

自今後執政輪月停止公事総達、御用掛私事達文武大奉行勘定頭裏判御吟味等以下御老御奉行等迄皆元ノ支配とナル、公事家大人ニ達し私事文事大奉行

廿五日曇、早天試馬

午後訪和田氏兄弟在焉云、今朝西原小三来、只管請離縁之事、兄弟辞焉

廿六日曇、午後勝藏来談、今朝訪西原氏・小三郎言請離婚非有他也、下婢之事云々、勝諾而婦来告、又托勝而報西原氏下婢之事、属于巷説須速帰婦人

廿七日晴、早朝訪岸和田謝周旋之勞、且言下婢之事、勿為念

下午試馬 追廻

此日東信出寄書于山部・岩垣〔岩垣龍溪〕託詩・桑原〔藩士桑原字九〕三家

廿八日晴、夜雲昇来言、西原氏頗爰前議余不堪憤懣、託雲昇而報西原氏下婢之事、決不勞念須以明日送返、婦人不然乃永託婦人于西原氏善護視之、雲昇諾而帰

廿九日雨、晚雲昇・勝藏来言、小三郎大變前約事不諧、委曲見於往復手扣

○六月朔晴 下午試馬

二日晴暑甚晚驟雨、下午訪岸・佐善・宮原・毛利〔藩士佐善元立〕〔藩士宮原穰〕〔藩士毛利定次郎〕四家而帰

三日雨、午後晴、東信至〔開水府臣僚四五輩就縛〕

四日晴、京師山部兄書至、去月廿二日有詔外夷之事、暫被任關東之処置、諸臣宜沈靜云々、又賜伝奏以下殿上地下諸臣發憤忠烈之士金有差又以內使内之賜物于三条前内府公云々又聞、水滸上人十余輩竊入京幕府逮捕甚急未得又幕府下令改貨幣小判一歩判停止、新鑄二朱銀一歩銀以新一両一歩換、古金一両貨幣日昇又外国金銀以量目通用未曾有之奇事所謂可痛哭流涕長太息者

五日暴風雨 西原翁先日以來無礼極矣、且二三其言然忍而至今日未得一言之謝余不堪痛憤欲一言挫其銳逐件條列問之岸雲昇云々、曰直報之西原翁二不自殺則腰脫矣、須恕一二日余別有好处、直云々乃亦托之雲昇、

其雲昇詢之、〔藩士〕佐野增藏云〔增藏郡方長役小三郎旧友〕

六日曇

七日晴、下午調馬

八日晴、早朝訪牧野氏〔藩士牧野宗次郎〕

東信出〔寄書山部兄報西原加無礼于我之狀、且謀処置之事〕

夜雲昇來話、一昨增藏訪小三郎審說曲直利害、小三郎大感服、須与親戚謀議以明日報焉而至今不得報云々

九日晴、下午調馬

聞、六日下申伊勢侯臣安田三治郎狂乱拔刀入左衛門侯第頗騷動、第内又入荒尾藏人、大西義左、荒尾志摩、

荒尾但馬、和田邦之助第乱妨、最後入荒尾千葉之介第其人縛之、三治郎本姓旧井氏出嗣安田氏、千葉之助

実異父同母之弟云事、聞一昨八日賜自尽家滅

七日夜岸本某〔藤次兵衛嫡子學校徒並教授〕發狂、自権現道拔刀大呼奮刀、歷立川中土手吉方渡一本橋、歷川外至丹後街就縛、

其夜入牢、連日狂人拔刀騷動城下何等怪事、又聞八日夜菅氏僕拔刀騷動、鹿野街

十日雨、未得西原氏之報、早天促岸、下午雲昇折簡招余、余訪雲昇、々々云、過刻增藏來、告小三郎大辟易

与親戚會議、親戚皆許諾、須速還云々

十一日雨、早朝和田勝来云、訪岸氏謀迎復之事

十二日雨、早天促雲昇、々々報書、曰、昨日与西原氏會議、今日西原謝、過和田而後、今明二日之内婦人必
 婦宅請安意焉云々、乃午後訪和田氏訪、西原来、否二人曰、自今朝持西原来、未来云々、乃以和田氏之言報、
 岸二適、他行今日又空遷延矣、不堪憤懣、日暮和田・瀬内書至言、日晚小三郎来謝前過云々

十三日雨、早天瀬内来言、昨日小三郎云々之状

下午雲昇来言、今朝小三郎投書、須以今夕還上婦人云々、雲昇又報書許諾云々、嗚呼自去月六日議論往復

今日乃得帰宿夜婦人至自西原氏西原内氏携婦人而
而至慇懃謝前過

十四日雨、下午西原幾来話謝前
過也

十五日雨、下午訪西原・和田・牧野拝

天皇祠而帰

十六日雨午後晴 朝西原翁来

午後詩文会堀氏

十七日晴下午馬驟雨 午後古海調馬遇雨而帰

夜京大坂信至、山部兄惠雲上明覽、桑原惠帷子一

十八日晴暑甚

十九日晴、此日北堂君与新婦、応和田氏之招

廿日晴、下午調馬追廻
馬場

廿一日晴、此日入大暑

廿二日晴、下午調馬

廿三日晴、下午東信達、聞五月下田開港、英夷數百人館于江戸

廿四日晴、下午調馬

廿五日晴、早天訪牧野・和田・西原、而歸、夜訪内田氏其処女二人〔露土内田源二郎〕姉十八妹十二病死

廿六日晴、自初旬一種率暴瀉病コレラ暴急病流行、凡感其氣者大吐瀉兩三度即死、医不能施術、藥不能奏功、十數日間

府下死者、且三百人、可恐之甚也、其病症去秋關左盛行者昨日如内田氏姉大瀉、兩回苦痛殊甚、妹又感其

氣大瀉、一兩度不竟時而死、姉懷其屍而歎感又死一時之間、姉妹入鬼祿〔之〕不可憐之甚哉

廿七日 近日流行盛行、凡感其氣死者日々數十人

廿八日晴、此日晚伯父君妾阿磯死今朝伯父君以書招余、至乃妾自昨夜大吐瀉氣息奄々、医藥無效、日暮入鬼祿、妾梶掛邑人今朝走人報、其家兄弟二人日晚來々々乃瞑目矣、廿九日滅了、掃葬于梶掛邑々係和田氏之采地、其弟梅十郎者為主焉○凡感流行病者キナ塩能治焉、廿八日飲、妾以キナ塩三分三厘価銀百錢○葬具一式法事料等総二百廿錢内百十錢梅十郎

廿九日晴、下午内田源二郎妻明石氏没廿五日二女死今日母亦死不可憐之極哉明石氏尊大人之從妹往問焉及晚而歸

晦日晴夜大雨

○七月朔大雨午後晴

二日曇、比日病死尤夥

三日雨、此日湯淺平藏死西原氏二男出嗣湯淺氏者士人死者且三四十人老幼婦女不可紀、〔藩士二宮圭之助〕一宮奎、〔藩士〕熊沢極馬、〔藩士〕唯九十九等

皆死 李幸而免

山部兄書至曰、京師無事然檻車東行不絶于今、伏見奉行内藤原・京尹浅野某東下

伯州会见郡竹内邑民鉄三郎ナルモノ、御馬御用ニテ南部仙台刃エ参リ中仙道帰リシニ、水戸藩中松村平太夫ナルモノノ上京スルニ逢イヌ兼テ見知リシ二人ナレハ道中道連レニナリ少々ノ手ニフリヲモ其長持ニ入レ貫イ帰リシニ、六月十二日追分ノ宿ニテ差留メニ相成リ一応吟味ノ上ニテ平太夫并ニ家臣ハ細乗物ニ入レ即日江戸へ送り、小者二人若党一人ハ追放ニ相成リシ由、鉄三郎ハ道連レノワケヲ話シケレハ構イ無シ、只荷物ハ長持ニ入レアリシヲ長持封印付ニナリシユエ若シ京御屋敷ニ届ケ来ラハ渡シ與ヨトテ六月廿四日二右ノ鉄三郎山部エ参リテ頼ミシ由

岩垣書至

四日雨、東信達

聞、尾・越ニ公ハ月髪御免御庭遊歩御免有リシニ、水戸ハ其沙汰ナク家中及領分大ニ騒ギ立、既ニ江戸ニテモ彼は周旋シテ事不成死ニ就クモノ七八人ニ及ヘリ、五月中ニハ野足輕・農兵等二万余人小金ケ原ニテ出テ江戸エ訴ントセシヲ其沙汰聞エケレハ小金新宿松戸流山ニテ水戸ヨリダシク人ヲ出シ差留メ漸ク静マリケルコシ

五日雨、東信出寄書、大坂赤座桑原勝部、京山部、江戸山田・石原

六日雨、聞、近日死聞 官者士人妻孥庶百廿余人、市人二百廿余人、陪臣奴隸百人余、其他不聞官者亦可百数

十人、振古未曾有之事

七日雨、參城賀正

公以病不視朝、此日藩士參衙者比常日三分之一、流行病之盛可想視

妻西原氏以其伯父死不設星祭

八日晴、古海調馬婦途訪荒木氏

九日晴、午後訪湯浅氏弟其喪湯浅氏居于七反畑與後寡婦守空房

十日晴

十一日晴、早朝牧野西原弟寄書曰、其父七平暴吐瀉氣息奄々、余走訪焉七平方在床、苦痛殊甚午後頗穩申牌沒遺憾々々、先是其母病朝不謀夕弟瀉、甚一家三口皆病別無親戚來会者唯馬場甥岡本妹在、余奔走周旋于牧野

氏

十二日雨、此日在牧野宮喪事

十三日雨午後晴、此夜葬牧野氏天德寺先塋之側此夕墓地既掘了、初更將葬而其地係宮脇氏墓地寺僧未請改分地、余不許半夜出棺鳴葬了、而婦于家

十四日晴、訪牧野氏夜婦弟及寡婦病少閑

十五日晴午後雨 午後訪西原氏、牧野氏夜婦

十六日晴、今日至明日牧野氏初七日法会、午後之牧野氏俄然暴瀉二行、頭軫々驚而婦、托岸服藥

十七日晴、臥床終日水瀉八行、京信至山部兄無恙

十八日晴、臥床終日水瀉四行

十九日晴、臥床終日、西原翁未問病

廿日雨、病愈

廿一日雨午後晴 早朝山部兄書至、京撰問亦頓病大流行云々、又今春就縛東行、九条家老女村岡者、先年東行、

マ、梅 掬問不屈性掘強多弁、而今亦東行、応対如流、而先大將軍簾中實薩公女九条家養女生母係村岡、以故自奥問姿訊謫簾中

生母何等罪而然否、政府無対大困窮云々、又京君与力二人自殺云々檻車東行多無罪之人故然云々午後訪牧野・和田・西原、

而婦、牧野弟疾愈伯母亦病少間

廿二日晴、午後調馬、近日流行病大減、郡村大盛

廿三日晴、此日至明日

祖母岡村君七回忌辰行佛会於養源寺親戚來会者六人、晚飯於僧酒於客

廿四日晴、拜祖母岡村君墳墓而、婦午前西原氏使來岳翁自今朝暴吐大瀉、余与内氏馳訪、其病手足微冷脉微

神衰顔色枯槁視、余曰予終不起矣後事君能焉此夜在西原氏

廿五日北風暴雨 在西原氏

夜半仙台曩二水大暴漲城外民家率沒水、城内昇濕之地水深四尺或五六尺

廿六日雨 在西原氏 朝牧野鹿野門内水及腰牧野弟内水深尺餘聞仙台河筋暴漲水損殊甚

廿七日晴 在西原氏 翁病危篤医皆曰朝不謀夕矣

廿八日晴 在西原氏 翁病少愈而少女日晚暴吐瀉拳家混殺極矣

廿九日晴、翁病少閑少女大愈、此日東信出 寄書山部兄

八月朔晴、早朝参衙賀正、公以病不視朝、午後訪西原夜婦

二日、此夜西原氏、此日北堂君之牧野氏

午後訪西原、医云、今朝水瀉五六行、神心頓衰萎大危矣、余陪衾察其脉殆絶矣、拳家混殺、日晚遂瞑目、

號哭可知、夜訪黒部監察議西原発喪之事 (藩士黒部權之介)

三日晴

終日在西原氏營喪事、夜婦、此夜濱村飛報至、異艦一隻見于遠洋 同役黒部ヲ以テ引籠リ出率ノ御断リナリシ、了テ退願ヲ出シ御役御免之上日晚無頃仲ケ間ヲ以死去ノ遺シ

四日晴、早朝訪西原、午後訪牧野遂宿以牧野祖母叔母病篤也 祖母出居岡本氏七平実母至晩病少間 以異艦出沒于遠詳慮情不足滿城如

佛旗頭隊将率兵待命

五日晴、辰牌飛使歸咨、昨夜濱村詰高田某乗官船尋異艦于洋中不見帆影遇大船 千五百石積位米船 于洋中訊事由、船主曰

昨過此洋者、非異国之船幕府倣異船而製者七月念八日与余船同發箱館運米于大坂者高田某以飛使聞其由即
日解嚴

夜葬故監察西原舅于妙要寺先塋之側、夜半歸

六日曇時々雨、午後訪牧野西原病、此夜内氏婦

七日晴、早朝訪牧野氏西原下午歸、晚牧野寡婦病甚使來、余馳問至乃小閑

八日晴、西原翁初七日忌辰午後之妙要寺晚之西原氏

九日晴

【間部侯托病辭職云々】

早朝之妙要寺夜訪牧野、東信着山部兄書至、京師無異

十四日御發駕御内定被仰渡ケレトモ御飛脚ニテ江戸御様子分リシヤ、御發駕御延引ニナル

十日晴、東信出寄書于山部兄○下午訪牧野一泊

十一日晴、早朝歸自牧野

此日毛利定次郎為銃頭、夜飲于毛利氏

十二日曇夜大風雨、午後訪西原・牧野、此日大坂諧歌師林曹俗稱來談酒焉、船磯邑鵜七郎者欲開木綿座于大坂

(二) 桑家俳諧宗匠

來談酒焉、船磯邑鵜七郎者欲開木綿座于大坂

詢之林曹、々々許諾、五月中來于島府面中野良助會議可否、而良助区々營眼前小利無遂大之識、林曹大失望、

介山内原錄請、謁家大人、以故此日來談形狀雄偉似有為者焉、自言生国淡州須本人住大坂西国橋南以諧

歌授徒云々

十三日大風雨、山部・勝馬至自京師

以其生母七回忌在明月也、拳家無恙、隼太書至言近狀無異、勝馬宿于花房弥次兵衛宅

十四日晴、早朝訪牧野・西原、晚招勝馬

十五日晴夜雨、此日牧野七平、三十五日修法会于、天德寺午後会于天德寺訪牧野、而帰贈以酒二升
醬油二升

十六日曇、早朝会牧野法会于天德寺

十七日晴、早朝訪牧野

十八日晴、早朝訪牧野・西原、々々酒焉、午後帰

十九日晴午後雨、早朝訪牧野、養母病危篤辰半牌瞑目養母不知姓氏、相伝安永村土民子、四国州人來寓于島府、与安長邑民此

夜于牧野寺町堀際大工町入寺町〔藩士〕堀際門、東向山田弥兵衛采地五百石、職銃頭売宅地余与家尊之弥兵衛視其宅二雖不美、此余家大可、且

地陪于余地価二百五十金乃其它地屋敷拜領替之約束ニテ山田ハ沢住ノ家ニ行也売余家于吉村又兵衛采地五明日又兵衛來視余家

○東信着、当月初旬神奈川至横浜途中士人数人斬、魯西亜人三人一人即死、一人婦舍而死、一人創淺士人不知何処人、官搜索甚

急不能得云々、嗚呼亜墨自入横浜官家狼狽畏縮唯命、是從士大夫奄々無氣息唯恣其所為無一人、誰何者而

今此数人憤發慷慨、奮不顧身可謂天下義士聞、此不覺大呼浮一大白

廿日晴、此夜葬牧野養母于天德寺、夜半帰

廿一日晴、訪牧野・西原

松田元道〔藩士元医者〕官ヨリ内意ニテ医者ニテ家業拙ナク治療モセズプラ々々然トソ、世ヲ渡ルモノ還俗願ライタシ候ヘト御七ヨリ伝達アリ、元道及ヒ土佐柳庵、大嶋某出願ニ及ヒシ所、今日願ノ通被仰付知行五拾石減少、永代家業御放シ

廿二日雨、訪牧野

廿三日

廿四日晴、午後会牧野養母初七日忌、于天德寺夜飲于牧野

廿五日晴、早朝会牧野、法事天德寺

廿六日曇、此日寄書京山部

廿七日晴、午後訪西原・牧野

廿八日晴、聞、太田閣老退職、(大田資始)問部老唯管事、関外国者時事亦一變莫

廿九日曇晚雨、午後会牧野七平、七々日法事于天德寺晚帰

○九月朔日晴、早朝會牧野七平、七々日法事天德寺、帰途訪西原小酌而帰、此日阿城文三郎来、請船名余名以換通丸○六百石積運漕船

二日雨、西原招飲、男去月今夜没故招余及秀伯

東信至、伊勢侯叔父松齋君、(龜田信忠)去月廿一日卒

三日晴

【公卿議論アツテ今度関東ヨリ送ル所ノ企ヲ請テハ義ニ非ストテ請ケ不被申、関白于家ノ預リトナリシ由、突ニ感心ナル事ナラズヤ】

京報着山部兄書至、自大將軍府献金五千両于 天朝九条公増封千石職中送米五百苞、公卿以下至地下役人被送金二万両云々

夜二更新次郎、公子大病

四日晴、早朝家尊參城昨夜深更參城候、公子病、(藩士)此日山田弥兵衛ヨリ其宅地ヲ請取ル

五日晴、早朝家君參城候、公子病、午時公子病急早チ遂逝去、満城悲歎、晩御葬送迄諸事物静御触

六日曇

七日雨、此日至明日西原舅五七日法会詣、妙要寺晚之西原氏午後六日急飛至自江戸云、去月廿七日有令(徳川齊昭)水戸老公永蟄居于水戸諸臣某ニ賜死

令

(徳川斉昭)
水戸前中納言殿

水戸前中納言殿御事、国家之御為筋之儀被仰立候、御当然之儀ニ候えば御建白之次第御取用無之御家来之者を以御見込之筋品々京都へ被仰登、加之ニ御養君之儀ニ就而ハ輕き者共、宮堂上方を取締候始末、関東御暴政之筋ニ申成し神心惑乱為致御譏奏ケ間敷事より終ニ重キ勅諭を輕輩之為メニ取扱、且綸旨を懇願等ニ及候段、公義之御確執国家之大事を醸候筋ニ而不容易儀、仮令御家来之者共御内存を察し、私ニ周旋致し候儀ニハ候共、素々御心得方不宜々右躰之次第ニ至り、被对公義御後闇キ御取斗ニ候、依之急度可被仰出所ニ候度、重き御法会も被為済候、格別之思召を以テ水戸表え永蟄居被仰出候

(徳川慶篤)
水戸中納言殿

【越十月朔差控御免】

水戸中納言殿御事、前中納言殿京都へ種々御内存有之候々御家来之者共御意内御察不容易企ニ及候次第、被為对公義秘而御後口聞き儀も有之、御父子之御間柄無御拋儀とハ心中御取斗方も可有之處其儀無之、就而は御家来之者共嚴重ニ取締可有之筈之所無其儀、剩御家来未之迄多人数出張致し、右之取鎮方等も御不行届之至ニ付、急度可被仰出儀ニ候へ共、是迄御配慮も被為在候上之儀ニ而、御情実不被得止事御場合ニ相聞、依之格別之思召を以御差扣可有之旨被仰出候

(徳川慶喜)
一橋公も御慎隠居被仰付

【同廿八九日夜八時老公コマゴメノヤシキ御発駕、水戸御帰リ被迎候ニ付、右ノ列侯御使番共水戸エノ口々警固御堅メ】

当日水戸御屋敷固メ

松平肥後守〔松平春徳〕

久世大和守〔久世広福〕

土屋采女正〔土屋黄徳〕

小笠原右近将監〔小笠原忠憲〕

阿部伊勢守〔阿部正弘〕

牧野越中守〔牧野貞明〕

土井大炊頭〔土井利位〕

戸田安之助〔戸田忠忠〕

御使者

瀧川主水〔瀧川元徳〕

京極左衛門〔京極高樹〕

清水八十五郎

小栗又一〔小栗忠順〕

小出玄蕃〔小出秀光〕

浅野一学〔浅野長正〕

水戸御家来左之通被仰渡

切腹

水戸家老
安島帯刀

死罪

同勘定奉行
鮎沢伊太夫

死罪

同奥祐筆頭
茅根伊予之助

獄門

同京留守居手添〔水戸藩士〕
鵜飼幸吉

中追放

〔儒者〕
池内大学

遠嶋

鷹司家諸大夫〔小林良興〕
小林民部権少輔

於京都押込

近衛殿老女〔津崎矩子〕
村岡

同日御家ニも御差扣御伺ニ相成リ候所、不及其儀旨御付ケ札ニ相成一統安心いたし居候所御取混しもよし
ニ而御取返しニ相成、又々奇異之思イヲ為しけるニ、又夜四ツ時分愈不及其儀旨申来候、一同恐悦奉申上

安嶋帶刀ハ水戸ニテ人望アル男子也、〔水戸藩家志〕戸田忠太夫ノ弟ニテ安嶋ニ養ハレ側用人ヨリ家老ニ転ス、当五月中水戸郷土等一万余人、流山・小金・松戸・新宿辺エ出張、冤ヲ訴ヘシ時江戸頗ル渴ニナリシカハ、安嶋・鮎沢・茅根評定所エ呼出サレ、其日御預ケニナリシシカ、今度右ノ次第也、尤此三人去年モ水戸エ引取テ勅諭伝達ノ事ヲ主張シ、此五月ニモ水戸郷土ヲ鼓舞セシ事疑イナシ

【安嶋・鮎沢・茅根三人ハ六月中、九鬼侯ト竹中図書頭等エ御預ナリシカ此度如此】

鮎沢伊太夫ハ高橋多一郎〔奥右筆〕頭取弟ニテ兄弟トモ水戸ニテ若干ノ名アルモノ也、当時勘定奉行ヲ勤メヌ、茅根ハ元弘道館訓導ニ被召出、郡奉行見習ニ出シ去辰年江戸エ出テ奥右筆頭取ヲ勤メ又氣節ノ士也、我レモ一両尋ネテ心安キ人ナリシ

鵜飼吉右衛門、年久しく京都ノ留守居ヲ勤メシ人也、同幸吉ハ水戸ニテ福地方ヘ食客ニナリテ居リシユエ、予モ二年余同居セシ人也、差タル氣概モナク学問モナシ、尋常ノ人也シカ、一昨年京留守居助役ニナリテ上京セシカ、昨秋広橋殿ヨリ出サレシ勅諭ヲ水戸ノ邸エ届ケシ罪ニテ獄門ニナリシ也

半知 〔本郷奈緒〕
本郷丹後守

改易 〔石河政守〕
石河土佐守

【永井・岩瀬兩人ハいまだ嫡子于別段切米頂戴御役を勤メ家督ハ不被下旨】
切米被召上隠居 〔永井尚志〕
永井玄蕃頭

同断 〔岩瀬忠寛〕
今度隠居ニ相成候 作事奉行
御役御免 岩瀬肥後守
小普請入 〔川路聖謨〕
川路左衛門尉

八日曇、朝詣妙要寺会西原法事此日所命隠岐月毛五歳馬來、自伯州堺浦納屋茂輔、其男某宰

来

九日雨夜大雨、夜之西原氏

十日雨、母親膝下歸自牧野

十一日雨、此日徒于山田弥兵衛宅混殺極矣

十二日雨、結納夜勝馬之小山氏以事起草率簡便極矣

廿六日晴、下午調馬

廿七日晴、以家尊明日祇役于大坂雜沓極矣

廿八日風雨甚緊、家尊祇役于大坂辰牌発程、余騎馬奉送之上茶屋道逢備前大夫池田伊賀嫁女我〔同山妻老〕 鶴〔ママ、鶴殿〕 藤次郎〔音延〕

儀状甚嚴

廿九日雨還晴

晦日晴、午後訪牧野・和田・西原小酌歸

此日飛脚至自伏見、公無恙達于伏水

○十月朔晴夜暴風雨、早朝手馬二疋〔河原毛出雲馬、借今町房〕 午後与諸同人会箕浦小二郎

二日晴、京報至、山部兄書至、拳家無恙京師無異、前月関東所送于公卿之金公卿會議不肯受還却之、禁裏附

武家許、嗚呼所謂大和魂者武臣失之、而公卿維持之天道循環嗚呼亦可恐哉

三日晴、午後会小山法事于天德寺、夜母親膝下之牧野氏此日山田弥兵衛拝領屋敷一圓借宅御断御聞届濟御目

付戸次半兵衛合申来ル

四日雨午後大風、午前拝観音院先塋

五日雲、晚訪芳心寺遊虛上人

六日晴、訪牧野・和田小酌、于西原氏而帰、此日御触来

当七月廿七日暮六時比神奈川横浜町ニ於而何者其不知魯西亜人を殺害ニ及逝去行衛不知、其節魯西亜人水夫所持傘銀ブリッキ箱入之俣紛失之处、其後神奈川太田町堤外海面ニ右箱銀錢十六枚金錢一枚捨置ニて且右刃傷ニ及ひ候場所ニ左之品捨有之候

【大強入意】

一、麻嶺返し割羽織 一

一、刀之折 七寸程

一、麻裏草履片足

右之通りニ候間、末々ニ遂穿鑿あやしきもの見及聞及候ハ最寄奉行所御代官所え可訴出もの也

又

此度洋銀同位之銀を以一分銀吹増被仰出候間、在来一分銀取受、無滯可致通用事

【同等怪事】

右、二触父事右衛門荒尾但馬公触有之

七日雨、早朝入学試験、夜会牧野養母七々日法会、夜半帰

八日曇、朝会天徳寺

養父七平夫婦之墓を一処ニして八尺四方一尺寺高二地上を為し、五尺二三尺五寸之台座を並へ分限不相応

なる石塔とハなりぬ

午後槍場門弟數十人來、学校出席之事を議ス

夜堀庄二郎來、話ス

此日大坂へ飛脚來ル、御父様益御機嫌能、去ル三日大坂御上着被遊候由、恐悦ニ奉存候事也

九日雨、堀・佐善・秋山・箕浦四子來談、夜半散

（津上秋山忠朝）

十日曇、朝訪牧野・西原

十一日晴、此夜北堂君婦自牧野

十二日晴、早朝与牧野・松田聯騎遊、細川觀漁、晚帰

東信出恭奉書于父家尊膝下

十三日晴

十四日晴、此日恭奉書膝下

三日飛脚出

内、西原氏自六月有妊至是月五月例呼嫗有懷帶之儀、此日以吉辰呼嫗用ケ瀬屋

ナル儀了、酒焉酔臥

十五日晴夜雨、早朝騎送三原豐之助于叶村、大坂警衛交替此日發者隊將横川以下四十人雜沓極矣

夜訪佐善小酌而帰

十六日曇、早起屋瓦皆白、以昨夜霰雪緊也、午後訪西原

十七日晴、此夜吉村又兵衛招飲、

早朝試馬城内訪箕浦近江、下午会松田法事光明寺、夜飲松田

十八日晴、早朝入簀、下午東信出恭奉書、膝下及山部兄

十九日晴快晴暖極矣、早天試馬城内晚家尊十一日所發之書至客中安泰公事遂件辦了、以来來月三日発程云々、

恭奉賀山部婿書至、以十日夜之大坂会于家尊云々、岩垣書至去月廿一日妻長病医藥無效遂没廿二日葬了云々、夜母親膝下之牧野

廿日曇、午後入學、夜訪牧野

廿一日雨、早朝牧野法事昨今勇勝院百ヶ日法事天德寺へ仏參石碑立派二なりぬ、碑面ハ田村中老、両脇ハ我書也

廿二日晴、早朝訪西原試馬上ノ丁齊藤馬塚也

廿三日晴、早朝試馬城内、此日新二郎公子四十九日法事 午後訪子光廿一日為學正文場之事默涉皆座申奏、儒

者以下皆受、其節度學正之職始于此

廿四日晴、早朝試馬上ノ丁、此夜牧野弟招飲西原幾之丞

廿五日晴 此夜牧野招飲、早拝芳心寺先塋訪遊虚上人觀楓、小酌

東信至

君公長途無滯十日參府云々、恭奉賀以水戸公無皆勤之事、公未仕田村図書為中老助普代番頭次側用人請持

廿六日晴、試馬上ノ丁、連日大坂守護之人數十人帰

廿七日晴、此夜北堂膝下帰自牧野、此日恭奉書家尊膝下

廿八日晴夜大雨、試馬上之丁

先日堀子光問學制処置如何、草一書予之、此日佐善移居于學舍、凡儒者四人正崎・佐善野崎・景山賜官舍于學校東南隅、

夜訪西原圍碁夜半帰

廿九日雨

○十一月朔晴、早朝試馬、午後訪荒木・西原小酌、夜帰

二日雨、東信至和田・箕島書至

君公長途無恙十日達江邸即日執政用番え御出有之、上使も被為請、萬々首尾能被為済候、忝恐悦奉申上

十七日夕七ツ時本丸中ノ口下部屋陪臣小やゝ出火、御本丸不残焼失之由、是又天戒ナルベシ

三日雨、早朝騎送松田元之進于上ノ茶屋祇役于大坂晚帰

四日雨、夜訪士達于官舎小酌

五月晴、試馬追廻シ

晚尊書至 膝下益安泰公事逐件了々、三日発程云々恭奉賀

山部兄書至尊大人膝下、廿二日上京廿六日帰坂処々ニ陪従云々

六日晴、早朝訪和田・西原小酌、此日毛利移居于大工町往賀焉亦小酌毛利移居余周旋大勤、夜佐善来

七日晴、晚書記卯里某婦自大坂、言明日膝下帰宅之事由

八日晴夜大風、早朝迎家嚴君子上茶屋恭奉賀無恙未牌帰宅、親戚属吏市井之徒来賀者數十人

九日大風雨寒甚、夜招馬場弥太郎酒焉

十日晴、午後応田中氏招竹之丞田中近妾上村氏托煤灼之事、此日送結納于上村氏

十一日風雪寒甚、夜田渕武右衛門招飲、武右剛直慷慨俗吏中所希視、堀庄・田渕・唯在座、夜半散

十二日晴、午後入学試槍

十三日晴、早朝試馬城内下午学校槍術組合晚帰、夜会西原法事百ヶ日夜半帰

十四日晴下午雪、此日学校両社遷宮一則国府一宮一則鹿嶋加路神職某去年京都吉田ヨリ分ケ御靈ヲ請歸リテ最初ヨリ加路エア
顧ニテ遷シ奉リシ也、此事余大ニ議論スレトモ事遂不行届遺

憾ト云 へシ加路国府共早朝御宮ヲ出玉ヒ町奉行一人ツ、供奉ス、両社共午時学え入り玉フ、御名代執政参政迎之

学問遷宮神樂之儀盛ナリ 本御発駕前遷宮ノ沙汰アリテ儀状出来シカ大ニ盛ナル事也、然ルニ公子逝去、水戸騒動ノ事有リテ事止ミス、此度ハ御留守居ト云フヲ以テ儀状甚簡也、物議を恐レ玉フ故ナルヘシ、白木ノ銚白木ノ神輿ニテ供奉ノ人毛町

奉行ノ外ハ皆 神職ノミナリ 余訪西原拜鹿嶋宮渡鑄物師橋

十五日雪、午後訪牧野弟近日臥床

聞三条前内府公薨去 始感憤使然 天朝贈正一位嗚呼人之云亡邦国殄瘁不堪慨歎

十六日晴、試馬 城内

弟近日肺腑ヲ患フ、原周亭ニ托ス、周亭曰病大危非一朝可治、举家大驚、母親膝下昨夜之牧野

十七日、終日牧野 試馬

十八日 弟病大危余大憂自此終日終夜在牧野護病 終日在牧野 試馬

十九日、終日在牧野

廿日曇、終日在牧野 試午

念一日曇、荒尾内膳隼人猶子荒尾左近家名立家統被仰付、此人扶持被召出番頭格被仰付

終日在牧野

念二日雨

【此日東信出】

終日在牧野夜宿、城内試馬

念三日夜風雪甚緊、終日在牧野夜宿

念四日、風雪、終日在牧野、弟病少閑、夜宿原・岸二医来視病

念五日晴、早朝辞牧野、城内試馬、午時又訪、牧野夜帰、原・中村二医来

【此日左衛門公召家君賜上下服】

念六日快晴、早朝訪牧野、此日原・上嶋・岸三医来、視疾、夜帰家

弟病頗愈医者云、追日可治不堪祚舞、我心大降矣、初托原・中村、十八日岸雲昇未視所察頗異、乃請岸謀

二医又謀上嶋、大概大同小異四医相議遂至治、亦天幸

念七日快晴、試馬_{城内}、訪弟病

念八日午後雨、午後会牧野法事於天德寺、夜飲于牧野

念九日雨、早朝会牧野法事于天德寺、午後訪西原小酌、夜帰

晦日曇、試馬_{城内}

○十二月朔雪

二日晴、早朝訪牧野、夜訪田測小酌

三日曇、此日水戸原任書来報、江戸近状審矣_{〔原市之進〕}

四日曇、此夜尊母至自牧野

五日風雪、学校槍術組合婦途訪牧野、晚毛利招飲

六日風雪、発起雪壓菅深殆一尺、夜西原幾来

七日風雪、早朝入学試槍 午後訪子光見、其故人報、江戸近状者不堪痛憤録左

御小姓仙石左近組曾我權
左衛門家来医師春堂養子

死罪

飯泉喜内

五十二歳

三条家々来

中追放

丹羽豊前守

三十六

鷹司家々来

押込

高橋兵部大輔

五十二

小普請明々組
下田奉行手附出役

押込

大沼又三郎

四十一

押込

飯泉春堂

越前侯儒者近侍ノ由

死罪

橋本左内

二十六

鷹司家々来

中追放

三国大学

五十

三条家々来

永押込

森寺因幡守

二十八

中追放

同 若狭守

廿六

京河原町三条上ノ
夷川ノ後口住居

死罪

頼三樹三郎

三十五

青蓮院宮家来

中追放

伊丹藏人
三十四

押込

山田勘解由

神田久左衛門_{二十二}日茂地
家持鉄之助後見弥七各叱

手鎖

源助

小綱町_{五十八}名主_二て欠
落いたし候もの

々

伊十郎
四十五

木原丁三条上ル上大坂丁借屋住居

所拂

宇喜多一蕙
六十五

々

同 松庵

松平丹波守領分松_{三十四}
本丁二丁目大名主

中追放

茂左衛門
六十

同所

手鎖

源右衛門
四十一

浪人山本貞一郎嫁

急度叱り

むめ
二十五

々

々

さくら

妾

二十一

々

とよ

四十二

一条家来

中追放

入江雅楽頭

四十一

久我家来

永追放

春日讃岐守

六角油小路西江四十九
入借や住
居大覚寺門跡家来療病院

遠嶋

六物空萬

九十九

松平伊豆守領分奥州
伊達郡同原田村百姓

々

八郎

四十七

三条家来

押込

富田織部

四十五

松平容堂

土州侯也

其方儀家督中、堂上方へ不容易事申通し候趣相聞候、京家へ通路之儀ハ猥ニ致間敷筈之処、右体之次第不憚公議致方ニ付、急度可被仰付候処、当時隱居身分ニ付御有免を以、慎ミ被仰出候

嗚呼一昨夏江戸へ帰ル時ニ京ニテ梅田源二郎宅ニテ頼三樹〔頼三樹三郎〕へ面会、其後帰ルニ臨テ三樹へ寓居を尋、半日

議論を上下スル、酒々落々中誥々之氣を帯ひ、其市尹浅野中務少輔と議論不合とて絶交し家風を守て公卿

之門ニ出入せざるを話しき、而ルニ正血を以て死ニ至ル誥歎之極也英泉之下乃父山陽翁ニ謁セハ哲見山陽喜見于面

八日雪

九日晴時々雪、夜木下文庵招飲

十日晴、晚秋山豊招飲、同人会者四人、夜半散

十一日雨、朝訪牧野

十二日晴、試馬 場所中ノ丁

十三日雪

十四日晴、試馬、午後会堀・佐善・景山・秋山四人、此夕即四十六士復讐之夜

十五日雪

十六日、試馬 城内

十七日晴、下午訪牧野

十八日風雪、余近来窮甚謀同志某々為世間所謂講者 高二貫五百目催講也、余家憚リアレハ景山ニ宿ヲ頼リテ会ス、料理ハ余ヨリ送ル、凡会スルモノ佐善修蔵・景山龍造・渡邊勝蔵・秋山豊之・田淵武左衛

門・岸雲昇・但馬屋文二郎也、堀庄二郎・林善人・原田常露三人以事不会、余か窮亦極矣

十九日風雪、下午会于学 先是有令諸師範家門人召連と正九ツ時学ニ会ス、余とも看坊ニ從イ学ニ至リテハ滞りありて詰メ居りしに、八ツ頃小学ニ至り惣人数千余人もあるへし、御家老・御中老・御側用人・御目付送会、御家老駿河申渡し、大要学餐

ハ繁栄ニ相成、歡喜ニ至候趣故、此段達 御聞候間、尚又出精可相勤旨也

晚山部兄書至

江戸にて又左之通決獄之よし、山部兄今申来ル

百日押込 有栖川家臣 飯田左馬

病死 浪人 梅田源二郎

永押込 小舎人 山科出雲守

中追放 浪人 池内大学

洛内外江戸拂 一条家 若松奎頭

病死 西園寺家家臣 藤井但馬守

重追放 宇和島家来 吉見吉左衛門

中追放 浪人 藤森恭輔

遠島 薩州 日下部祐之進

遠島 水戸 勝野豊作森之助

五十日押込 岡部某家来 笥庄三

百日押込 御掃除之者 岡本常助

三十日押込 水戸 大竹義兵衛

々 井上左大夫組 藤田忠藏

中追放 水戸 宝寿院厄介とき

永追放 松平讀岐守家来 長谷川宗

主人引渡し 同 速藏

紀州江戸拂 紀州領 恰太郎

死罪 長州 吉田寅二郎

此吉田生ハ先年亜墨へ御渡之事蹟て国蟄居ニナリシカ此度又慷慨奮発遂ニ死ニ至リ候也

廿日曇、此日田中竹之丞娶上村春柳伊勢候之臣之女余韓媒酌之事

廿一日晴、午後之西原氏夜一泊、此日西原幾之丞家督二百石無相違蒙命、此夜娶辻金一姉余亦媒酌之事

廿二日、午後婦風雪、車朝訪牧野和田市

廿三日晴、早朝訪牧野・和田・西原小酌晚婦、山部兄書至、近来蜜舶多買絶及綿故、京師西陣総店困迫殊甚故、絲買勝貴

奸商因縁成奸此日絲買三百人余成党襲奸商某々之家、官捕其唱首十八人、其後官施西陣糸商男米五合女米

三合五十日、岩垣書来、寄菓及盆

廿四日晴、午後西原来、夜牧野弟招飲

廿五日、朝訪堀・景山

廿六日晴、朝拝芳心寺先塋訪遊虚上人小酌下午婦、夜訪田測武右

廿七日晴、午後訪牧野・西原小酌、而婦

廿八日晴夜雨、此日西原妹嫁石原幾之進食禄三百石番士午後西原氏一宿而婦

廿九日雨、此日牧野弟娶加須屋氏弟四女加須屋平太郎祿四百石、伊勢侯附人余午後之牧野一宿

晦日雨、午前婦自牧野家事如沸、晚之和田・西原・安田小酌而婦送年、嗚呼一事無成年又徂矣、光陰如矢

二十五年、今宵過矣醉来不堪慷慨

○安政七年庚申正月朔旦

元日 雪全消路尚滑 儀節如例

二日雨夜雪、午後訪牧野小酌夜婦

三日雪搔起雪深殆尺、午後訪西原小酌夜半帰

四日風雪太緊

五日雪、此日例陳甲招親戚酒焉西原・小山・牧野・安田・石尾・和田・渡辺来会

此日寄賀書、山部・山田^尚・桑原^三・松田^元・前田^{平一}

六日雪

午前秋山来、小酌晚帰、夜与秋山訪佐善

七日晴、午前訪牧野、入夜帰二途訪子達、又小酌而帰

八日風雪太緊

此日与牧野弟^{〔藩士〕}应加須屋氏之招^{祝儀}、尊父母膝下及余三人其他客数十人四更帰家

九日晴午後風雪、早朝拝年于諸方、此日西原招余酒焉、夜亦应安田氏之招、夜半帰

十日風雪午後晴、夜于孝士達、秋山生来

十一日晴、夜訪秋山小酌賦詩

十二日晴、早朝入城試馬

十三日晴、朝訪子光

十四日晴立春、家君参城^{甲冑御祝イ}石原幾・辻金一・山本清来^{拜年}

十五日晴、午後訪西原

十六日晴、東信着

荒鹿幸助^{御抱角力前頭ニテ近來ハ有名ノモノナリシカ旧臘江戸ニテカサヲ病ミ屠腹而死ス、大坂朝日山ノ弟子ニテ真律ト改名セントナン}

官奴某与品川妓相刺而死、銃頭山本判事、小林彦左衛門、若党二人盜其主家、物火其官舎幸火未及發吏捕之、
鈴置・利根等数人誤門闕云々

十七日曇寒甚、朝試馬訪牧野弟小酌夜婦

十八日風雪、此日西原招石原所謂祝儀振舞内氏之西原氏・内氏近来暴悍剛腹、余不堪憤懣以故、今夕托病不訪、西原

氏須明日招、幾之丞謀去就之事

十九日風雪寒甚、此日招石原幾告以、内氏近日頗剛腹且言宜訓告戒諭服罪而後許婦

廿日晴、此日初試槍門生來着十許人

廿一日曇午後雪、試馬城內西原來言嚴戒之乞許其罪、余諸焉

廿二日風雪、午後婦人婦

廿三日風雪太緊、此夜毛利定二郎拳男安田氏

廿四日晴時々雨、試馬城內訪毛利・牧野拜本願養源寺祖母君靈

廿五日風雪

廿六日雪寒甚

廿七日晴、雪又雨、午時士達來

廿八日晴、午後拜年、東信出寄書于山部・和田・神戶〔藩士神戶大助〕

廿九日晴、春色漸沖融

晦日雨

○二月朔晴、試馬

山部兄書至、惠故内大臣贈正一位三条実満（ママ）公式紙一葉不堪感荷

二日曇、神戸・石黒書至

（藩士石黒文三郎）

三日晴、侍熊藏・重藏皆去、之他新抱善藏花房氏侍・龜藏原氏侍・長藏牧野氏侍外僕一名

聯騎与吉村隼佐遊于浦留晚帰、処々見梅花春色大至

四日雨

五日晴、入学試槍訪子達

東信着

【内氏・建部氏以夫氏死幽鬱為病不五日而亦死】

大小姓大塩弥六屠腹而死客秋陪駕而東病疾慷慨云々、亜墨人実紀州船頭傳吉者飄流亜墨遂為彼人從亜墨而來江戸為中行說者也一人過上三田一士人刎首而去、

不知所之蓋慷慨之士

聞、殿下自東下以来与小石川邸往復頻數、或夜半近臣馳馬而使或彼使來、我邸者公退左右而見 公親之小

石川邸者每月五六処、此嫌忌世略而 公不曾為意焉左右有志者皆恐且五月 公将就国然察当日之勢今年帰

国不必得命臣子之深憂云々小姓角田鉄三郎寄堀庄二郎書夜訪西原小酌、夜帰

六日晴、朝訪原田帶霞・毛利・堀・岸

七日雨、午後学試槍 山田久之丞書來

八日雨、此日東信出寄書山部托筆數種午後訪堀善六困甚

九日晴、朝訪牧野小酌、午後入学試槍

十日雨午後大風、朝訪宮原

十一日雨、此日初午滿城鼓声如沸、余与内氏之外舅氏

聞、頼三樹三郎妻某氏屠腹而死、嗚呼有此夫而有此婦節義萃于一門、余四年前訪三樹、内氏周旋進酒、時方二十三、頗有姿色因憶、佐々原數馬寓江戸淺草其所知之妓大坂新町某屋之妓某某慕来于江戸未幾數馬病死數馬以方名世所謂神童者伯國人其来江戸也、遺其妓抱医書而歸于大坂、其後余西歸謁伯園有一尼年二十三許橫冊者乃佐々原氏妻也、曰余寓居于昌平數往来、自失夫氏亦無意人間之事、剃髮結庵于北新地修冥福云々、雖与頼氏事異其節義之心乃一也

十二日晴、近日家有土木之事、玄関狹少旧臘新建玄関今春遂及内玄関

此日鍛師幸田甚太夫・木瀬与茂左衛門木瀬支封臣木瀬師而今春幸田受讓正月幸田稽古初、木瀬及旧師野間鹿藏泣兒酒酣呼坊間宋三弦者喧呼達旦糾明之上、雖可正典刑以格外之恩惠急度差控、馬師中山所兵衛先月稽古初呼妓助酒亦同罪

十三日曇晚雨、試馬追廻、午後入学試槍此日例大幸也昨日以幸田・木瀬・中山蒙譴、三家門人不許入学我槍枝弟子幸田久三郎以中

山氏門人自学中追反ス、蓋三家門人臨其席者恐入申上ル等之由也、事蹟煩碎二渡ント雖へトモ稽古場二町人ヲ呼ヒ三弦舞蹈酒ヲ助クト云フハ大二武道之衰微大息ノ事ナラズヤ(薄土)

十四日雨、午後試槍于学、晚浅井又藏招飲

十五日曇、試馬城内

十六日晴又曇、午後訪子孝賦詩、夜散

十七日曇、試馬城内

十八日雨、午後訪西原・石原・荒木晚帰、夜西原幾来圍碁夜半散

十九日曇、試馬城内

念日風雨太緊

念一日、早朝会浅井、法事于妙要寺、晚西原幾之丞招飲、夜半帰

念二日雨

念三日曇、試馬城内

念四日午後雨、午後招西原後室幾丞妻政太牧野弟及妻和田叔母君及甥石原幾之丞・馬場弥太郎酒焉祝儀振舞年頭札兼夜半散

念五日晴、試馬城内帰途訪佐善

念六日雨又晴又曇

先日有令、天保小判一枚以一步銀三両一步片換之以故藏小判百金者得一步金三百三十餘金人心淘汰既而換金者多官不能償銀、以故大坂・京僅以銀二円換小判一枚云々、聞此事起自仏蘭人建議幕府信其虛誕布令于天下而銀不多加之亜墨人建白金價太貴請低其價幕吏恐二三其令欺曰、官府憂金少而貴價買金、且金銀之高低自我日本中之事、何関亜墨耶亜墨唯々而退即日以小判二十萬両請換銀、幕府応以銀償之、加之江戸富民金換銀者太多幕府不能償以故雖令一布天下僅以銀一円一步或二步換小判一匁如彼国欲不斃豈可得乎哉

又聞、亜墨頻買奥馬、近日東婦人來告、幕府送馬六十匹于亜墨、々々受之横浜云々

念七日風雨、聞亜墨使正月下旬横濱出帆蒸氣船一隻夷人乗組軍艦一隻薩侯所献

外国奉行 村垣淡路守〔村垣範正〕

〃 新見豊前守〔新見正興〕

軍艦奉行 木村摂津守〔木村喜政〕

御目付 小栗豊後守〔小栗忠順〕

御勘定組頭 森田剛太郎

外国組頭 成瀬善四郎

〃 調役 合原猪三郎

御普請役 増 駿河二郎

〃 辻 房五郎

〃 上役 吉岡元平

〃 松本三之進

〃 吉田善四郎

御徒目付 小川達太郎

御小人目付 清水久三郎

〃 栗嶋彦八郎

御船頭 土州飄流客 中浜万二郎

御師頭 鈴藤善四郎

〃 飛驒浜二郎

其他船民水師陪卒等数百人ト云々

念八日晴、晚從 巖君飲于牧野初節句祝儀之加須ヤモ来会ス

念九日曇、石原幾招飲与西原幾晚之、石原氏二更帰

○三月朔時々雨、拝養源寺先塋、京報達前日所托之筆数種来

二日晴、拝観音院先塋芳心寺先塋、遂訪遊虚上人小酌、午後試馬追廻

三日晴、午後訪安田・和田・西原、飲于西原氏

四日曇、以明日家尊発程祇役于大坂親戚及出入之徒来飲、雜沓極矣

五日快晴、早朝 父親膝下祇役于大坂例以発程自今年以三月爲例小子奉送之上茶屋、親戚及出入之徒送于叶村于上茶屋者数

十人、晚帰安田・渡迎來飲

六日快晴、早朝試馬城内

七日晴、慈母君腹痛夜半発熱甚、内氏亦暴熱余不堪憂慮、招岸不在、門人来献藥

八日快晴、慈母君病未愈托周亭・原氏

九日雨、慈母君大愈、内氏依然

十日

十一日、夜西原舅来

十二日雨、午後訪武右、西原入学試槍

十三日、午後入学試槍組合

○江戸ヨリ急飛着ス五日認メ七日割去ル三日上巳ノ御礼ニテ諸侯大夫士登城アリ、彦根候井伊掃部頭五ツ時登城アルトテ屋敷ヲ出ラレ外櫻田ニテ参ラレシ上杉弾正大弼屋シキ前ニテ狼藉者二十許人ヤニハニ掃部頭乗物ヲ目懸ケ鉄炮ヲ打掛ケ二十余人ノ者トモ拔連レ切テカ、ル、駕脇ノ者防キ戦イシヲ或ハ切殺シ或ハ手ヲ負セ難ニ無ク、掃部頭ヲ殺害ニ及ヒ首ヲ取り本望ヲ達シタリ逆不殘引取り日比谷見付ヲ這入り八代洲河岸ヲ通り拔ケ龍ノ口閣老脇坂侯ノ役宅江訴へ出、天下ノ大奸大惡大老彦根侯ヲ打取首ヲ持参仕候、乍併天下ノ元

老タル人ヲ殺害ニ及ヒ候上ハ御法ノ通り御仕置被仰付被下候様ニと申出ル、則チ左ノ通りニ御預ケ等ニナル御ヤ敷ノ前ヘヲ通りシ時、箕島市郎ハ七人連レニテ拔身ノ刀ヲ提ケ掃部頭殿ノ首ヲ太刀ノ切先ニ貫ヌキ皆々深手ヲ負テ通ルヲ見シト申越ス、狼藉ニ及ヒシ人ニ皆々水戸ノ藩人也、アマリ慷慨ニ堪エ兼憤リヲ井伊侯ニ洩シヌル也

水藩

佐野竹ハ水戸ニ
テ知リシ人也
此四人脇坂侯役
宅江訴エ出ツ

小姓役
佐野竹之助
大番組
黒沢忠三郎
寺社役
蓮田市五郎
静ノ社人
齋藤監物
大番組
一作和七郎

大関・森・杉山・森山四
人ハ細川ノ邸エ訴エ出

大関和子五郎
廣岡愛太郎
山口辰ノ助
馬廻リ
森五六郎
杉
横山弥一郎
（ママ、鯉）
鮎淵要人

此人ハ鉄炮
師ノヨシ

樽方

廣木奎之助
森山繁之助
稲田市蔵

増田金八

関鉄ハ一昨年冬因幡工
来リ我ト親シキ人也

関鉄之助

渡海勝之助

薩州人

有村治左衛門

以上 拾六人^七也

此内ニ一人ハ外桜田ニテ戦ヒシ時打死セシ故、同志ノ者首ヲ取テ持チ、井伊ノ家人エ首ハ取ラレズヨシ
 二人ハ備前様御ヤシキノ後口御堀端ニ深手ヲ負ヒテ倒レ死ス、此一人首ヲ一ツ持タリ、一人ハ辰ノ口ニ深
 手ヲ負テ倒レ自ラ腹ヲ切テ死ス

有村治左衛門ハ左リノ腕ヲ落サレ、龍ノ口遠藤但馬守辻番所ニ上リ自ラノ姓名ヲ呼ヒテ翻意ヲ達シ今ハ思
 ヒ置クコトナシト云テ死ス、此有村首ヲ一ツ持タリ○此有村カ持タル首ト堀端ニ倒レシ人ノ持タル首ト首
 ニツ有リ、一ツハ掃部守殿ノ首、一ツハ同志ノ打死セシ人ノ首也、何レカ掃部頭ノ首ナルコトヲ知ラス
 内七八人細川侯エ御預ケニナル大関・森・横山^杉・森山・佐野・黒沢・蓮田・齋藤也

【佐野脇坂邸ニテ自殺セシ故細川ノ邸エ行カズト云】

木人小傳馬町士人牢^{四人ハ即死内一人ハ外桜田二人ハ備前邸ノ後口ニテ死ス、一人ハ有村也}其外其場ヨリ逃ケ去リシ人ニ五六人アルヨシ

井伊家ノ供人手負死人左之通り也

深疵 日下部三郎右衛門

手疵 片桐権兵衛

即死 河田忠左衛門

同

澤村軍六

手 疵

櫻井猪三郎

同

小河原秀之丞

同

柏原徳之進

即死

加田九郎太

同

永田太郎兵衛

手疵

草刈 鋤太郎

同

松居貞之丞

同

萩原吉二郎

同

越石源三郎

薄手

石枝甚之進

同

渡辺恭太

同

藤田忠兵衛

同

水谷求馬

手 疵

岩崎徳之進

薄手

吉田太助

手疵

彌右衛門

同

勝五郎

右之通り也

井伊ノ屋敷ト外櫻田トハ咫尺ノ地ナレトモアマリ草率ノコトニテ屋敷ヨリハ馳セ付ルモノモ無く、其上此日風雪甚シク咫尺モ辨シ兼シヨシ、乍併井伊家ニテハ大道ニテ切り殺サレ首ヲ取ラレシト云ハレテハ済ヌコトユエ左ノ通り御達シ有リテ四日ニ病氣ノ御達シ有テ直ニ御死去ノ弘メアリシト、箕島市郎申越ス

井伊侯御届ケ

今朝登城懸ケ外櫻田松平大隅守門前（上杉齊憲）ニ上杉彈正大弼屋敷前ニテ狼藉者二十余人鉄砲打懸ケ凡式拾許人拔連

駕目懸ケ切り込候ニ付、供方之者共致防戦狼藉者一人討留メ、其余手疵深手等負セ候ニ付悉ク逃去申候、拙者儀捕押ヘ方致指揮候処致怪我候ニ付、一ト先帰宅致候、尤供方之者即死手負左之通御座候、此段御達し申上候トアリ、此レハ表向ニテ其实ハ首ヲ刎ラレテ死セシ也

嗚呼天下之大変古今未曾有之事水戸ノ人士ニ在ツテハ憤鬱ヲ散シ快事ナレトモ天下ニ在ツテハ此等ノコト大不幸ナラズヤ、此上如何成リ行キテ何ント処置アルニヤ可恐ノ甚シキ也、匹夫ニシテ千乗ノ君ヲ殺スコト犬ヲ殺スカ如シ、嗚呼又何ソ彦根ノ腰拔ケ侍イ多キヤ、此ヨリ後彦根ノ臣子何ント処置スルヤ

公義分左之通御触レ有リ

水戸家来

此七人ハ二月中水戸

高橋多一郎

表出奔致候ニ付、水戸

関猪之助

左之通出奔いたし候故

吉成恒二郎

若シ他領等へ罷出候と

林忠左衛門

御召取之上御引渡シ

廣岡愛太郎

被下候様ニて前以て

森五六郎

御届ケニ相成居るよし也

濱田平助

此外ニも二月中段々

出奔いたしけるよし

右之者共水戸表致出奔候間、他領等へ罷出候ハ、別而速ニ召補候様可致也

此七人ノ内ニモ前ニ名乗り出テシ人々モアレバ高橋・吉成ナドモ一処ニ井伊殿ヲ打殺シテ、又水戸へ逃ケ
 歸リヌト見エ、此頃又水戸ノ段々人氣立テ多人数出張致スト見エ其上三日之變アリシ故、左之列侯へ左之
 通仰渡

松平肥後守

久世大和守

右之家来呼
 出し被仰渡

土屋采女正

牧野越中守

(牧野貞直)

戸田安之助

今朝掃部頭登城を水戸殿家来共及乱妨候ニ付而は此上水戸表ノ若多人数致出府之儀も有之候ハ、兼而相達
 し候捕押へ方之儀厳重ニ手筈致し候様

松平肥後守

(酒井忠徳)

酒井左衛門尉

大久保隼之助

(松平定敬)

松平越中守

同文言時宜ニ依リ可有御沙汰候間、早々人数差出し候様兼而手筈可被申付候

御屋敷御届書

八代洲河岸御名一手持、辻番所前へ今朝五ツ半時比異形之体ニて拔身ヲ持ち拾人程罷通り候者有之ニ付、差留メ可申と声懸ケ候内、無答足早ニ龍ノ口の方へ行去り雪中故行方見失ヒ申候旨辻番人共申出候、此段御届申上候

【実ハ声ヲ懸ケルト水戸ノ侍也ト云テ通りシト云々】

御名内

山本三七郎

十四日、大坂信至、家名無恙十日夕着大坂^{恐悦申上ル}

十五日晴、此日牧野弟西原幾其他十四人^{都合十六人也}詰メ江戸用意次第出足蒙命表側用人羽田豊前支配ニ被命、豊前

モ同シク江戸出足蒙命以江戸有変也

牧野弟と婦只二人ユエ此度不意ニ江戸被仰付、大ニ当惑スルナリ、此夜 慈母君モ余モ参リテ世話スル也
余ハ婦リ
母君滞留

此日不時東信出、恭奉書家君膝下

十六日曇、午後訪西原・牧野

十七日曇

十八日晴、此夜初更内氏頓腹痛發、急呼医南条迎、慈母君于牧野氏招西原舅至曉痛益甚心下胸間欲裂亦呼豐

田秀伯午時少弛

十九日晴、内氏胸痛益甚呼豐田秀伯、種々藥午後少弛懷中十余条、或下夜中胸痛亦甚、南条・豐田徹夜護視、

此日奉書于膝三日割大坂信出

廿日晴、此日病少閑唯一粒不入口

廿一日晴、此日胸痛又大發、遂招大谷且庵、按腹二度用和氣飲少弛、此夜豐田・大谷護視徹

宵

廿二日曇夜雨

【邊田半夏茯大谷和氣飲】

此日少弛午後且庵來、夜秀伯・玄俊・且庵來夜半歸

廿三日晴、朝胸下又痛呼且庵按腹小弛

牧野・西原發程在近而西原舅來、視病慈母君不得之于牧野氏混淆極矣、此夜慈母君之牧野

廿四日晴夜雨

【豐田為苓通氣】

内氏疼痛少愈、此夜慈母君歸自牧野・西原舅歸

廿五日晴 内氏疼痛甚

東信出恭奉書

膝下及山部・石原金三ッ送り馬バ・牧ノ・西原
三人ノ膳碗ヲ調エ置タレヨト頼

廿六日晴

【大谷・和氣隼ノ外半砂加、大昔ハ鷓鴣豊田葉無】

内氏疼痛愈甚、此日自下午至曉下痢、三行虫十余条下、午後訪牧野・西原以明日発程祇役于江戸也、晚婦廿七日晴、早朝送牧野・西原・馬場于叶村、且庵・秀伯相議、以虫痛未已用セメン五分将軍五分甘草三分、此日疼痛亦甚晚招原三人相議、又用セメン五分甘草二分別用小半加茯苓丁

廿八日晴南風暖甚夜雨、且庵・秀伯来相議、用セメン及小半加茯苓如昨日、晚原周斎来ル、此日疼痛大輕食亦進夜西原舅来談宿

廿九日曇暴雨雷鳴、朝且庵・秀伯来議、藥法如昨、此日病頗佳、晚玄俊来手馬月毛養生箕浦下邸

晦日曇午後暴雨雷鳴、此日内氏病頗佳夜分快寝、午後大谷・豊田二医来

閏三月朔晴暖甚服单衣猶覺熱、午前前月廿四日大坂発尊書達客榻益安泰公事幹了以、晦日発程云々

又曰、廿三日於天王寺二人於生玉一人自殺不知姓字、蓋前日殺彦大老而走者於天満一人就縛彼徒既殺彦大老走于四方不知何等之心事云々

待東信来至東海中仙二道物色太嚴、諸藩士人西上者函関追還之彦藩士人東下者荒井関停之、其他士人往来無槍及駄馬者駄吏恣檢衣物刀劍云々、又彦藩家老木俣某近日東下、従者三百人日行不過六里云々、彦藩之無能為不堪一笑、嗚呼彦根満城士人何不愧水藩人士乎

○晚廿二日大坂発尊書達三月十六日薩藩士一人大坂着早船ニテ薩工返サレケル

【此士人実薩人ニ非ス水藩人ノ由云フサスレハ水人三人ノ内一人ハ帍口ヲ逃レ二人ハ縛ニ就キシナリ、亦大坂ニハ非ス、伏見ノ薩邸ノ由也、山エ台も申越ス、何分伏水邸迄臆病ト云ベシ】

右ノ薩人召連レ来ル若党一人槍持一人幕府工差出サル、其若党一人槍持ハ水藩人金子孫太郎・安藤鉄三郎野由也、金子ハ南郡ノ奉行ニテ我会沢先生ノ女婿也、余モ水戸遊学中両三度モ金子カ役宅ヲ訪ヒ酒ヲ酌ニテ談セシコトアリ、頗ル氣慨アル男子也、之モ亦彦根ヲ殺セシ中間ニテ出奔セシコトニヤ、兎二角ニ可惜人ノミニテ皆一騎当千ノ人ナルニ其^{ママ、技量}伎^{ママ、技量}両ヲ醜慮ニ試ルコト能ハス、怨ヲ彦根ニ報ヒテ或ハ死ニ就キ或ハ僻郷遠地ニカマツテ時ヲ待ント欲ス、其志操氣節実与日月争光、然レトモ乱今日ニ至徳川氏ニ亦寓公耳

此薩人ト云フハ有村雄助トテ治左衛門ノ兄ナリ、国ニ走ラントテ途中ヨリ手付キ伴ヒ来ル金子^{金子之僕也}其僕^{僕也}安藤ハ伏見奉行エ引渡シ雄助ハ帰国サセシカ国ニ帰リテ自殺ス、金子ハ三日ノ場ニハ出ザル由ナリ

二日晴暖甚、東信着、家尊書至晦日発程云々、恭奉賀

聞江戸大変差シタル変ハ無ケレトモ諸藩皆門留メニテ警固太嚴、幕府ヨリモ不慮非常ニ備工候様仰渡サレケル故、諸藩一統門ヲ鎖シ兵食ヲ貯エ武器ヲ集ムル故、殊ノ外人氣立米価日ニ貴ク金一步ニ米六升ヲ売ルユエ貧民不支或子ヲ棄婦ヲ置テ自殺スルモノアリ、走ルモノアリ、又ハ白昼盜ヲ為シ人ヲ掠メテ口ヲ糊スルモ有リ、乱既ニ成ル御屋敷ニモ大崎合武器兵器鉄炮大筒迄不殘御上屋敷え御取寄セニ相成リ御門留ニテ殊ノ外緊シキコト也、此飛脚ニテ御警衛人モ増シニ被仰付由也

彦根モ未タ何ノ御沙汰モ無ク彦藩人モ替リシ挙動モナシ、素ヨリ水藩ハ泰然ノヨシ也

佐野竹之助カ羽織ノ裏ニ誠忠ノ二字ヲ大書シテ二首ノ和歌ヲ認メ置ク

シキ嶋ノ錦ノミミ旗捧ケ持皇御巫ノ先軀ヤセン

桜田ノ花ニ戸ヲサラストモ留メヲカマシ太和魂

細川侯エ七人御預ケニナリシニ此度外エ御預ケ替ニナリケル由、細川侯本意無キ事ニ御思召サレテ御隠居御願ニ相成リケレトモ不被仰付御国エノ御暇ヲ被預ケル由、未タ仰付タレハ無ケレトモ諸侯ニ在テハ皆々ケ様ニ有度コトト感心シ奉ルナリ

【此説間違ナリ、細川ヨリ願ニ依テ他エ預ケラル、細川ハ兼テ隠居願上ケルカ許サレテ隠居シ玉也、世子帰国イマタ数日ヲ歴サルニ江戸ノ隠居薨シ玉ヒケレハ世子亦江戸エ馳セ上リ玉フ】

米価騰貴百文二三合故エ道中籠六百元七百文ノ由也、乱既ニ成ルト云ヘシ、道中探索甚シク此間永田某帰国セシニ三度迄厄ニ遇ケル由也

山部兄書至、大変ヨリ所司代酒井侯関白九条公大ニ恐怖致タサレ、其後ハ一度モ門外エ出ラレス、若州ヨリ三百人等ト上京シテ屋敷ヲ警固シ又酒井ヨリ八十人ヲ分チテ九条ノ第ヲ守ルト云々、夜家尊書至廿三日於天王寺二人目殺スルモノハ水戸藩人高橋多一郎同人悴昇左衛門^{十九歳也}委細エ書置ヲ為シテ立派ニ自殺ス、生

玉ニ於テ自殺スルモノハ其名ヲ尋ケレハ篠崎ト云テ跡ハ分ラズ果ニケル由、天満ニテ捕ハレシ人ハ分ラズ、嗚呼高橋ハ鮎沢ノ兄ニテ余レモ能ク知ル人也、気慨男子ニテ水藩依頼ノ人物ナリシカ天下ノコト如此ニ及ヒシヲ感慨ニ不堪恨ヲ彦根ニ報ヒテ機ニ乗シ雄藩ニ謀ツテ事ヲ揚ント巧ミ此辺迄逃レ来リシカ逃ルコト能ハスシテ自殺セシナルベシ、篠崎モ亦有名ノ士ナルヘシ

我水戸遊学中丙辰ノ春正月長州赤川直二郎湊蛭藤ナル店ニ飲ミシニ松延貞雄モ来リ酒酌ニ樂ミシ時鄰リ

坐シキニ高橋多一郎少シ官途ニ付テ不平ノ悴ヲ連レハ未ダ前髪アリ痛飲シテ居リス、則チ一処ニナリテ大ニ飲ミ愉快ヲ極ム、夫ヨリ余モ高橋ニ懇意ニナリテ数往來議論ヲ上下シヌ此人學問見識卓然タルモノニテ殊ニ吏才ニ長シ奥右筆頭取ヲ勤メヌ、今ハ何役ニテ居リシヤ、連年有志ノ人或ハ死ニ就キ縛ニ就キケレトモ高橋ノ如ク役ニ立ケル人ハ少ナカルベシ、誠ニ惜シキ人ニテ水戸モ是人ヲ失ヒテハ路ニ困ルヘク有志之元氣モ衰フヘシ、サテ々々残念至極ノコトセル人ヲ犬死サスコソウタテケレ、併シ高橋モ彦根ヲ打取リシコトナレハ少シハ死出ノ心地ヨカルヘシ、燈下涕ヲ垂レテ書ス

家尊ヨリ書籍數種被下

諸方御達シ書等見聞ノ佯写シ置

○彦根家老共々願書

掃部頭昨日登城之節於途中狼藉者御座候処、右之者共ハ水戸様并松平修理太夫様御家來之趣相聞申候、掃部頭ニモ手負被申候程之儀ニ付昨夕分而之御達も御座候得共、何分家來之者共子細柄相心得度旨一同懇願仕候間、何卒御憐察被成下願之通被 仰付候様仕度、此段奉願候 以上

井伊掃部頭家老

(ママ岡本)

岡見半介

三月四日

御下ケ札

書面之趣ハ難引渡筋ニ候事

○薩州ヨリ御届ケ書

〔鳥津茂久〕
松平修理太夫家来

有村雄助

【此人金子ト同道帰国、金子ハ伏見ニテ捕ハレ雄助ハ国ニ帰リテ自殺ス】

右之者昨朝門出いたし今以罷歸り不申、右者昨日遠藤但馬守様御組合辻番所持場内相果居申候、元家来有村次左衛門と申者之兄ニ御座候間、早速手厚致、尋方候へ共、未夕見当不申、此節柄之儀ニ付御届ケ申上候

松平修理太夫内

三月四日

西 筑左衛門

○

紀伊守

覚

今朝於外桜田水戸殿家来之者、短筒ヲ以及乱妨候ニ付、万一銘々屋敷等江如何様之儀可致も難斗義ニ飛道具等ニ而及乱妨候ハ、此方々も鉄炮相用候事不苦候

○水戸御城付々公義江相届ケ書付を見候由

水戸殿家来

森五六郎

大関和七郎

杉山弥一郎

森山繁之助

斉藤監物

佐野竹之丞

右之者共其外同家来之由、拾五六人同道今朝外桜田御門前二而井伊掃部頭供方之者及刃傷同道之内即死怪我人出来候よし、就右前書六人之者共細川越中守居屋敷エ罷越し、其節之始末申述御法之通取扱相頼候様申立候由二而、右屋敷令使番を以て申入有之、其余同道之者ハ何方江離散致し候哉行衛不相分趣二相聞へ候処、右之者共ハ兼々相済不申次第有之、被为对公義恐入候儀と中納言殿殊之外心配被致取締方下知被致候得共、一円承知不致、去月十八日之始末二及候程之儀其忒国元立去り尋中之者有之候処、御場所柄も不弁不容易及所業不心得至極之者二付於公辺御大法之通御取扱御座候様被致度、其余流氓共御府内江立入候儀難斗早速手配方嚴重二相達し幾重二も探索致させ召捕候上ハ早速御届取計可申、尚又於公辺モ御手当御座候様被致度、此段旁々及御達置候様被申付候

三月三日

○三奉行へ御達し

今朝於外桜田、水戸殿家来及乱妨らんぼう候二付、多水戸殿之屋敷怪我躰之者出入有無等何とも組支配向々之者昼夜相廻嚴重心を付候様可被致候、尤水戸海道二多人数罷在候哉之趣も有之候間、若出府いたし候模様二候ハ、其段月番老中宅江申越し仕儀次第召捕之様可被致候

○水戸殿家老共^江御達し

今朝水戸殿家来之者共多人数掃部頭登城懸ケ短筒等相用及乱防怪我人等も有之候ニ付而ハ此餘末々之者迄心得違之者可有之も難斗候間追而相達し候迄昼夜共居屋敷下屋敷門ニ出入之者嚴重ニ相改メ重役之者相詰メ候様可被致事

○細川侯^江御預ケ御達し

細川越中守家来^江

大関和七郎^二五才

森 五六郎^二六才

森山繁之丞^二六才

死 佐野竹之丞^二八才

黒沢忠三郎^三六才

蓮田市五郎^二八才

死 齋藤監物

杉山弥一郎^二八才

右吟味中其方へ御預ケ被仰付候間、手当向池田播磨守^江可承合候事

○細川家取次大嶋五郎八口上^江写書

昨朝五時比表玄関^江案内を乞候ニ付罷出応対致し候処、私共儀水戸藩中ニて只今井伊掃部頭殿打取申候、御

役人方江罷出候筈ニ御座候処、何とも此度国元ノ始而罷出候者ニテ御当地不案内ニ付此方様江罷出申候、公義御法之通被仰付候様願度存念ニ付夫迄之間、乍御難題此方様江御育被下候様宜奉願候、且又此段上屋敷江も御知らせ被下候様との事ニ御座候、尚其場之始末懸り候処於外桜田辻番所松平大隅守様御門前之間ニて御行列を見懸ケ之躰ニ而御駕之左右ノ仕懸ケ候処、彼方ノも人数立塞り争鬭ニ及候内両方ノ四人斗差留直ニ御駕右ノ戸を明ケ御首ヲ取り候ニ付、一同ニ声を上ケ散々引取申候、此外ノ面ニハ何方エ参り候哉相分り不申候段申出候、右自然聞取違可有御座候、覚居り候丈ケ認申候

斎藤 大関 森 森山 佐野 黒沢 蓮田 杉山

右八人之者細川江参り候右之口上申述ル

山田辰之助 廣岡安二郎 関新兵衛 増子清二郎 廣木松之助 稻田重蔵 〔ママ題〕 鰐淵要人

海渡先之助 岡部三十郎

右九人之者何方へ参り候哉相分不申段細川御取次大嶋五郎八江申述ル

○馬場先御門戸田安之助殿番頭生沼藏人ノ順廻状を以今朝五ツ時比当御門御橋之方ノ疵請候侍体之者四人兩番所ニ罷越し内藤紀伊守様御役宅ニ致案内候様申聞候、然ル所御役人様方御登城懸下座中ニ付下陣之方へ相下ケ置様子可相尋存候中、其俣差急キ当御門外へ欠出し候間伝進懸ケ候へ共何方へ参り候哉相分り不申候へ共早速右之段御当番御目付様并ニ最寄御目付松平次郎兵衛様へ番目付使者を以御届申上候事

三日雨、内氏疼痛大ニ佳、午後豊田・大谷来、昨夜原来薬方ヲ留メヨリ宜明論呉菜羹湯ニ転劇之筈也

○江戸大變風説和田瀬内ヨリ申越ス手簡

一、去ル三日徒党之人十七人前夜高輪稲葉屋と申ス引茶屋江引カセ五六人ツ、品川宿相模やと申旅籠や江止宿、翌未明ニ稲葉屋へ帰り酒食仕、直ニ愛宕山江参り身拵へ仕り上、外桜田へ罷越し候由、愛宕山江右稲葉屋と印之傘拾本餘捨戦有之ニ付引合セとして稲葉や并ニ相模や町御奉行所へ被呼出

一、三日早朝徒党之者愛宕山江上り山伏法印へ壺両出し護摩をたうて右山伏江白木綿一反調へ呉候様相頼候へ共無人故改致候ニ付山伏不審ニ存し寺社奉行へ達し候へ共、其内桜田一件ニ相成、徒党之者昼ハ芝居或ハ物見所へ罷越し夜ハ女郎や江参り又昼ニなれハ所々江罷越し居申候由ニ御座候、夫故目立も不仕と申事

狂歌口合

橘は雪にしかれて首かさけ

からくりの糸ハ隠居が引て居る

かもんとの首がなけれハみともなる

雪故に桜田外てぬかれけり

桜田のちりハ細川流れこみ

密かんをすいで橘折にけり

いいかもを雪の降る日に首をメこ、へさむらハあた、まりけり

モウい、とゆだんのとこてやらた碁

(ママ、脱アルカ)

一、九日細川侯江御預ケ之内左ニ名前之者共左之通御預ケ替と相成

(前山藩主前田利四郎)
松平稠松丸家来 江

大関和七郎

黒沢忠三郎

〔膳所藩主本多康頼〕
本多主膳正家来江

蓮田市五郎

〔白水藩主稲葉親通〕
稲葉伊予守家来江

森 五六郎

〔村松藩主堀氏休〕
堀 丹波守家来江

杉山弥一郎

田村繁二郎家来へ

森山繁之助

右之通佐野竹ハ三日ニ死ス、斎藤監物ハ八日ニ死ス

左之面々ニ左之通認メ居り候由

有村治左衛門之懷中ニ

君かため身を尽くしつゝ、ますら男の名をあげとふて時をこそまつ

大関和七郎増美

何のモノのおとハ残さぬ春の雪

森 五六郎行宗

一すしにおとハそめけむ大和鯨うちて碎くる名のミなりけり

君か為メ打て碎くる玉ほこをうけてみよかし大和魂

杉山弥一郎 当

むさし野のいつか咲けむ山桜けふの嵐に散りものゝふ

蓮田市五郎 実正

欲挽頹浪回世運 一朝漸破奸臣頭 微艦従為藎粉滅 凛々英名千載流

緑酒奉歡慈母傍 花枝風興樂無彊 三更夢寢驚起座 不在家庭在他卿

おもふ事ありて

ふりつもるおもいを雪のはれハ今 あふてもうれし 春の夜の月

八日死ニ臨んで追討世之智勇と迄書て筆を投して死ス

佐野竹之助

割り羽織之両方のうらに誠忠と二大字を書きて其下二二首の和歌あり

敷嶋の錦の御旗打なひきすめら軍の先かけをせん

桜田の花に尸ハさらすともなにたゆむへき大和魂

又同志十七人左之通認メ一枚ツ、懷中ス

神代以来御国脉を相認メ此度外夷交易等御差免し如形御取扱御所置にてハ

皇国之穢此上も無き次第不得止事、有志之者十七人申合セ大姦惡之張本井伊掃部頭殿を奉打

三月三日と認メ居るよし

此外彦根ノ奸状ヲ認メ閣老脇坂侯エ出セシ書アリ、別ニ写シ置也

四日晴

五日晴、家尊歸自大坂、小子騎奉迎上之茶屋慶賀二候、午後駕歸于宅親戚屬吏來賀者若干人

此日午後内氏疼痛亦發

家尊御咄しニ廿三日天王寺ニテ自殺セシ高橋多一郎ハ悴と兩人天王寺参りて僧ニ座敷を借シニ我等兩人ハ水戸家中ニて某々と申ス也、此度天下之為メ大奸之張本井伊掃部頭を打取、尚又思慮スル所ありて此地迄参りたれ共捕手ニ被囿今ハ進退難成候衛は座敷を借用いたして自殺セんと欲スと頼ケレハ寺僧諾しぬ、則座敷へ上り刀を抜いて腹を一文字ニ掻切り其刀を寺僧に与へて申スニハ此刀ハ家重代之刀ニて小松内大臣之送り有ル刀也、只今迄秘藏スといヘトモ今ハ詮方無之長く寺僧に形見ニ贈ル也、秘藏し玉へとて差出し淋漓之血を以て辞世之詩歌を認メ最後ニ起テ障子ニ絶命之詩を書き了て脇指を以て咽を突て死スト云々、其中ニ悴昇左衛門ハ腹一文字ニ掻き切て失セぬとなん、誠ニ大丈夫之志死ニ至て不撓といふべし

六日雨、此日内氏疼痛益甚しく原周亭へ転劑いたし貰、此後ハ原と大谷と相談也、終夜痛ミ甚し吐く三度有之

○七日雨、午後原・大谷・南条来、内氏腰下疼痛

申牌嫡夫人西原氏拳男^{午後ヨリ催シアリテ申之牌男子生レヌ産識ニ易ク輕クテ内氏脇背ノ痛ミモ輕ミケレハ今夕ハ快寝セヌ、拳家歎声如沸我ラ実ニ舞踊ヲ覺エス}
八日曇又晴、内氏大快ヨク児亦無恙^{大丈夫ユエニヤ頓ント泣カズ}

九日晴、家尊賜小児芽名秀太郎、大谷来点灸姥来剃髪、内氏少有病午後亦佳

聞高橋父子大坂天王寺ニて自殺セシハ土地不案内故トソ、生玉辺ヨリ捕手ニ付ラレ頗ル危カリシテヲ天王寺ニ入りテ又外江通り抜ケントセシニ天王寺西門ヨリハ暁ニ開ケトモ餘ノ門ハ四ツ時ナラデハ開カス、高橋

門々ノ鎖スヲ捕手ノ鎖セシヲ心得テ寺^江案内シテ自殺シヌ、前ニ言フ如ク誠ニユクシキ自殺トソ、又生玉ニテ自殺スルハ篠塚源太郎ニテ同日山口辰ノ助ハ捕ハレニ就キヌ、又坐摩社内ニ嶋男也トテ水戸浪人ト称スル劍術ノ師アリ、此ノ嶋カ宅ニ高橋等宿リシトテ男也モ捕ハレニ就ヌ、皆三月廿三日ノ事也

十日曇、内氏疼痛大弛顔色大佳、夜疼痛再発困苦徹宵

聞万延ト改元アリテ詔書如此ヨシ、京師ヨリ申シ来ル

詔書

詔 皇猷脩明、則萬邦自能協和、政教叢脞、則皇天必降災眚、天譴影響、人事永谷、可不畏哉、可不慎哉、朕叨以庸昧躬、辱踐大寶之祚、夕盡惕若乾々之心、朝致鷄鳴孳々之思、去年武藏国有火災、大藩鎮為灰燼、固政令之不節、將教化之不行、況復蠻夷要和、事情雖穩濱海為市、舊制難復、奈何天意、恐失民望、加之地厲流行、黎庶損傷、災眚如茲、咎在朕躬、宜革舊号以施新元、蓋与物更始之義也、其改安政七年、為万延元年大赦天下、今日爽以前大辟以下、罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、咸皆赦除但犯八虐、故殺謀殺、私鑄錢強竊二盜、常赦所不免者、不在此限、又復天下今年半徭、老人及僧尼、年百歲以上、給穀四斛、九十以上三斛、八十以上二斛、七十以上一斛、庶幾傳昇平於無疆、除妖孽於未萌、普告天下、俾知朕意、主者施行

萬延元年三月十八日

大内記長說朝臣作進

臣忠謹テ按スルニ如此詔令有ルコト誠ニ難有御事ニテ

聖明之御德恐レ入りシコト也、抑関東ノ人々此詔令ヲ拝見セハ地ニ入ル思ヒナルベシ

前日中老田村貞彦退職為在方小仕置班普代番頭次貞彦忠義憤発一藩依頼ノ人ナレトモ近來位益尊而事多不行毎々退職ヲ請フトハ又婦役可被仰付旨被仰渡

三月廿一日側用人中老助役田村図書拝于中老在職中三百石加賜通計六百石此図書ハ世ノ所謂才臣智士ニテ大ニ君寵ヲ得タリ、側用人白井重之進ト相表裏シテ頗ル聰明ヲ惑乱ス、貞彦退職モ此兩人ヲ惡ミ逆モ事為スヘカザルヲ察シテ退キシ也故圖書ノ婚姻家ニテアレトモ其実ハ圖書百計貞彦ヲ陥レシヨシ、貞彦ノ甥堀庄二郎ニ啗セシヲ内々ニテ庄二郎ヨリ聞ク

十一日雨、此日内氏大佳

十二日晴、此夜内氏疼痛大発終宵大苦

十三日雨、此日秀太郎生七日呼医及姥酒焉以内氏有病不招親戚眷飯米炊赤飯贈医及親戚親戚及出入市人等贈産衣及酒肴者凡三十余人

内氏疼痛少弛、招針医上村春哲針治大応痛大佳

十四日雨

内氏疼痛大佳、十一日番将黒田日向急江戸蒙命附属番士及銃頭炮長炮士等陸續上途以江戸騒然也、学校有令十五以上、幼若之徒不許不入、文場而入武場儒者撰其人、文漸熱而許入武学、且寄宿居学之設計書生業成者入二寮、寄宿寮未成、居寮既成、且子弟八歳必使受業于儒者、必達執政、故監察致仕溝口半狂（藩士）乱今朝御判物携へ先祖之位牌ヲ腰ニ付ケ馬上燈ヲ持チテ出ントス、女房保坂氏大ニ驚キ留ントシケレハ拔打ニ大袈裟ニ打離シ執政荒尾駿河所ヲ控シニ江戸留守ユエ門ヲ鎖シテ不入、其レヨリ津田大夫ノ家臣奥田某ナルモノ、宅エ之キテ御判物位牌ヲ預ケ弓矢ヲ携へ荒尾但馬ノ門ヲ控シニ門番人レザル故、彼是ト議論スル中、其親戚ノモノ津川熊二郎駈付ケ漸ク伴ヒ帰リテ取押ントセシニ又驅出テ池田式部玄関ニ至リ、我レハ八幡太郎也、式部ニ面会セント云フ、取次ノ者半ヲ知シリニヤ、先生何ソ狂スルトイエハ我ヲ知りタリヤ、汝

二千石ヲ与フベシト云、親戚河合某駈ケ付参リテ伴ヒ帰ラントシケレハ、又河合ニ行キテ矢十本斗リ放チテ漸ク家ニ帰リヌ、午時漸ク捕リ押エシトナン、此半トイウ人ハ弓術ノ師範ニテ武芸ニ長シ心得ヨキ人ナレハ監察迄ニ至リヌ

当公御家督ノ時ハ監察ニテ江戸ニ在リシカ、水戸ヨリ雜賀孫市御使者ニ参リシカ三藩ヲ鼻ニ掛ケ開門セヨト云フ、半云フ、当家例三藩ノ人家老之外開門ヲ許サス、孫市一時斗リ争ヘトモ不得愈門ヲ開カズハ勝手ニ致サルヘシ、此方ノ知ル所ニ非ス門ハ此方ノ勝手ユエ其方ノ自由ニハナラヌトテ取合サリシ、此ノ時ハ当公御親政ノ初御実家ヨリノ使者ナレハ孰レモ諛ヲ呈シ開門スヘキニ少シモ忌憚ル所無ク法ヲ撓メザルコト感スルニ堪ヘタリ、又一年裏判ニテ江戸ニ在リシカ公家計^{ツマミ}大ニ窮シ如何トモ可為様ナシ半三村カ宅ニ参リテ金ヲ借ント請ヒシニ三村諾セサルユエ然ラハ拙者役義不立や旨意ニハ帰ラレヌ也、座敷ヲカ^{ツマミ}レテ自殺セント云フ、三村其精神ヲ感シ一万金出シヌ、其明年右ノ万金ハ必帰ント請ヒシニ時ノ執政外ノ用度ニ不足トテ出サス、半大ニ憤リ直ニ退役シヌ、其操行如此一藩人望アル人ナリシニ餘リ慷慨發憤狂ニ至リシナラン、平生甚タ嚴重ナリシニ妾ヲ置キ圍イ女ナドハヨクスル人ニテ今ニ至ルマテ圍モノ二人モ有シトゾ

十五日雨、午後諸同人会于瑞光寺折簡招、余ニ未牌往問興禪寺方丈遊虛上人・正牆・堀・景山・高原等在、焉詩酒耐這移時而帰、園池自藤紅杜触花盛開

十六日雨、朝秋山来、連日内氏疼痛大佳

十七日晴、聞、溝口半、^時内夜途屠腹^{此間中半ヲ拵ヘ入レ置シニ俄然夢ノ覺メタル如ク、何故ニ如此狹少ナル所ニ置クヤト尋ルユエ、}自^{此間ノ始末ヲ咄シ聞カセケレハ}殺イタシ^{聞ク半ノ妻保坂氏ト云フハ余程賢大人ニテ在リシ、妾アリテ家政ヲ專ニスレトモ曾テ嫉妬}今^{ノ情無ク半狂セシ日モ其狂ヲ見テ子供ヲハ妾ニ預ケテ外出シ自分老母ヲ伴ヒテ出ントヌ}朝達于官、^{ル所ヲ半後ロヨリ射殺シ其上ニテ切り殺シ自ラ坪ニ入レントテ水坪ニ入レケルカ思フヨウ}二入ラストテ面股ヲ切り首ヲ打落トシケル由、可憐ノ甚シキ聞ク者身ノ毛モヨタツ斗リ也

十八日晴、山部兄書至京師無異狀、只九条公兵衛甚敷姫路侯遣武士卅人守、其弟云々、又彦根侯思召ヲ以テ御役御免家督ハ庶長子愛丸^江下サル、旨^{愛丸妾腹十四歳}

聞ク、桜田ニテ掃部頭ノ首ヲ打取リシハ鵜殿孝三郎ナルモノニテ其場ヨリ直ニ水戸へ帰リテ老公^江献シ脇坂エ持参セシハ似セ首ナリシ由

又三月三日水戸ヨリ御達シノ内ニ去月十八日ノ始末ニ及ト云フコト有り、何等ノ事ニヤト思ヒシニ或人ノ伝エシ一昨年

天朝ヨリ下サレシ 勅書老公ノ手本ニアリケルヲ幕府へ出ストテ十八日水戸出足セシヲ途中ニテ奪ヒ取り老公へ差シ上ケ、且ツ曰天朝ヨリ勅アリテ奉スルコト能ハスハ天朝エ奉還スヘキニ今幕府差出スハ余リニ言甲斐ナキコト也、故ニ奪ヒ將テ献ストテ差出シヌル由、果シテ其事ニテ此便如此風説得タリ

二月廿三日在所表ヨリ急飛脚ヲ以テ申越シ候風書之趣、同廿五日着致シ候、古河塩ヤ伊兵衛忤元兵衛と申者、水戸^江売物仕入ニ而罷越、廿一日之夜罷帰候所、同所騒動之趣相聞へ、当十三日水戸下町七軒町并筒屋清兵衛方ニ止宿之處同十八日昼九ツ時於長岡駅乱妨人^{マヤ}有之趣ニテ為捕手町奉行野内人数召連レ下町ノ内紺屋町迄出張、尤諸勢待合有之所、長岡駅ノ方ヨリ拔身鎗等携へ多人数相見へ候時、町奉行無勢ノ儀ニ付、同所旅籠屋へ逃這入候ヲ外ヨリ障子越シニ鎗四本差通シ、尚乱妨相働キ候ニ付、其後御目付ノ内ヨリ御差シ向ヒ其頃ハ夜二入り候、尤長岡駅ヨリ餘リ候人数ハ七軒町迄押寄セ御目付捕手と立合、此人数凡五拾人位ニ見受ケ候、暫ク取合有之候衛兵何レエカ紛レ候哉不相分、其跡又五拾人程、是ハ紺屋町呉服ヤニテ金二歩出シ白木綿求メ銘々白卷等致シ候、夜中ノ儀ニ付相印ト相見へ申候、御目付ノ同勢ト取合、猶又一組何レエカ出張、御目付勢エ前後ヨリ立合、其後二至リ御目付方ヨリ鉄炮打出シ夫ニ驚候哉、左右へ逃散リ候様

子ニ付、追々御目付方同勢引取ニ相成候、翌十九日朝紺屋町と西町ノ取合即死手負数不知、右騒動ニ付仕入者等整兼、十九日昼前七軒町出立、尤下町ノ内通路難出来所モ有之哉、御城下上町佐久間町^江罷出候所、小手脛当ニテ手鎗ヲ持チ士人登城被致御家来町方共大乱ニテ止宿モ難出来、直様古田^江引取懸ケ枝川ト申ス所ニ三百人斗御先手ノ内御固メ有之、且菅谷宿ニ山野^{采戸藩家也}辺主水正様同勢五十人斗り切火繩ニテ出張有之ニ行逢ヒ申シ候、十九日夕古田エ着同所ニ廿日迄滞留候所、同夜深更ニ及候而農兵共水戸表ヨリ急廻状ヲ以テ鉄炮持参ニテ早々出張候様御触之趣申来候様申来候

別紙

此内長岡宿へハ多人数出張居候所、当十八日水戸御家老雜賀孫市出府ノ処、於同所出張之者引留メ早朝ハ八ツ時比迄差縫レ候由ニ候へ共、其俣出府有之候趣、同十八日夜ニハ御側御用人久木直二郎と申方ヲ登城ノ節五六人待受鑓ヲ以テ突留メ候内、其外御役人方門前ニハ張紙等致シ候趣ニ御座候、右之通荒増申上候

二月廿六日 ^(松平康英)松平周防守内 小池幸三郎

十九日大風、早朝試馬、午後東信着、彦根候去月廿三日御役御免、御相続庶子愛丸^(愛貴のち井伊直憲)殿御願濟ニ相成ル、未タ御逝去ノ御弘メハ無之由、水戸ノ士人ハ毎々評定所有之旨申来ル

廿日雨、早朝入学讀書午後試槍、近来内氏疼痛大佳、寢食殆復、故只即床四十餘日、疲労大甚、未能離床

(「安政六年己未日乗 一二」おわり)

